

<研究ノート>古典派経済学の外国貿易論(上)

著者	高橋 精之
雑誌名	社会労働研究
巻	14
号	2
ページ	71-135
発行年	1967-12-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/00017784

古典派経済学の外国貿易論（上）

高橋精之

はじめに——主題の性格

第一章 二つの世界観——スミスとリカード

第二章 二つの比較生産費説——リカードとミル（以上本号）

第三章 物価水準の国際的差異——リカードとシーニョア

第四章 比較生産費説の政策論的帰結——シーニョアとリスト

はじめに——主題の性格

一

今日はこれから古典派経済学の外国貿易論についてお話したいと思います。私が今日この問題についてお話するこ

との意義は次のようなところにあると私は思います。

第二次世界大戦後、アメリカを中心とする帝国主義諸国は高度の資本蓄積をおこなってきました。そして、その資本蓄積を支えてきたものは労働者と農民、要するに、直接生産者の剰余労働であります。ところで、帝国主義国の高度の資本蓄積を支えてきたその剰余労働は、単に、帝国主義国の独占資本の下で働いている労働者の剰余労働だけではありません。それはまた、いわゆる後進国、低開発国の労働者、農民の剰余労働なのでもあります。私たちは、帝国主義国の資本蓄積を問題にする場合、いつときたりとも、帝国主義国における独占資本の資本蓄積のこの国際的契機を忘れてはなりません。実際、国際連合の統計をみても、アジア・アフリカの諸国民の栄養水準は、戦後の二十二年を経過した今日においてもなお、まだ戦前の水準を低迷しているのです。事態の絶望的状况を考えるなら、むしろ「戦後二十二年を経過したが故に」といいたいくらいです。奇蹟といわれた戦後の帝国主義国の急速な経済成長のメダルの裏側とは結局こういうもの、すなわち、いわゆる後進国における貧困、疾病、弾圧そして侵略の激化だったのです。帝国主義国の御用学者はなにかといえば、この原因をこれらの国の生産力水準の低さ、資本蓄積の不足に求めますが、そうではありません。帝国主義国に従属しているが故に、剰余価値を生み出すそばから帝国主義国に収奪されること、これこそアジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国民の飢餓状態の根本原因であります。資本主義世界では各国は相互無関係に存在しているわけではありません。したがってまた、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの諸国民は二、三百年前に西ヨーロッパ諸国民が通過した道を現在歩んでいるのでもありません。資本主義世界は帝国主義国を中心としてひとつの有機体を形成し、その中で帝国主義国が後進国を収奪しているから、後進諸国民は貧しいのであります。これこそ、リストから現代のロストウに至るまで、もろもろの経済発展段階論者が見逃し、という

よりは意識的にごまかしてきたところであります。ですからアジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国を後進国と呼ぶのは正しくありません。また、国際連合がそうしているように低開発国と呼ぶのも正しくありません。何故なら、彼らの貧困の原因は生産力の低いことにあるのではないからです。生産力はたしかに低いでしょう。しかし、生産力の低いことは事態の原因、というよりはむしろ結果なのです。利潤を生むそばから帝国主義国に借款の利子として収奪されてしまうからこそ、いつになっても資本蓄積がすすまず、したがって低い生産力水準にとどまらざるをえないのです。ですから、名称というものが、もし、事物の本質的性格を正確に反映しなければならぬものならば、それは従属国と呼ばれなければなりません。そして今日、私が「古典派経済学の外国貿易論」というテーマの下に明らかにしてみようと考えているのも、結局、従属国に対する帝国主義国のこの収奪のメカニズムであります。したがって、それは、経済発展段階論者の「後進国論」、「低開発国論」に対するひとつの批判を意味しているわけでもありません。そしてそれはまた、帝国主義論のひとつの大きな課題でもあります。むかし、レーニンは「帝国主義論」において、帝国主義諸国間の不均等発展が植民地の再分割要求をひきおこし、その結果、帝国主義戦争を不可避免的に勃発させることを明らかにしましたが、帝国主義論は、もうひとつ、帝国主義諸国の植民地・従属国に対する収奪の苛烈さも明らかにしなければなりません。今日、前者の結果として、帝国主義諸国の内の最も弱い環から脱却して、ソビエト・ロシアが成立しているだけでなく、後者の事態の中から、民族解放闘争の結晶として中華人民共和国が出現してきたことも考えますなら、私たちは、帝国主義論のこのもうひとつの課題にも是非取り組む必要があります。

ところで、従属国に対する帝国主義国のその収奪形態について話をすすめますなら、それにはとりあえず次の二つの形態が考えられます。すなわち、第一には、帝国主義国が自国で生産した商品を独占的高価格で従属国へ輸出する

こと、および、従属国で生産された商品を買叩いて輸入するという形で考えられます。第二には、従属国に投資した資本の利潤または利子の収奪という形で考えられます。実際、従属諸国はおしなべて、どうしようもないほど巨額の対外債務に悩まされており、事実上、債務奴隷の状態にあります。ところで、これらの二つの収奪方法はたしかに誰の目にも明瞭な収奪方法ですが、もし、この二種類の収奪がないとしたら、すなわち、帝国主義国が独占的高価格で商品に従属国へ輸出するということがないならば、また、帝国主義国が従属国の商品を買叩いて輸入するということがないならば、また、帝国主義国が従属国に投下した資本から利潤や利子を収奪するということが、もし、ないならば、一体、帝国主義国は従属国を収奪していないといえるのでしょうか。それとも、そういう場合にもなおかつ、云いかえれば、前述の二種類の収奪以外にも、収奪が存在しうるのでしょうか。これが存在しうるとすれば、それは誰の目にもわかる価格現象の奥底にある、抽象的であるが故に基本的な収奪ということになります。そして、古典派経済学の外国貿易論はまさにこのことを問題にしました。勿論、資本主義世界が、その本史に入ったとはいえ、まだ未熟な発達段階にあったときの経済学のことですから、私がいままで述べてきたような収奪方法を意識的に捨象して議論しているわけではありません。しかし、独占的高価格とか買叩きとか資本輸出とか、そういったことがまだ系統的に現われてきていない段階の経済学であったが故に、古典派経済学は、無意識の内に、前述の二つの収奪方法がないとしても、すなわち、資本の輸出入を捨象した商品貿易の段階でも、また、それぞれの国での販売価格と同じ価格で商品を輸出したとしても、なおかつ、一方の国が他方の国を収奪するということがありうるのか、ということの問題にしたのであります。古い時代の諸関係は、またそれらについての理論は、現代の諸関係のヨリ単純な関係を示唆している、ということが、このことからわかります。まさに「故キヲ温ネテ新シキヲ知ル」です。私たちが今日、百

数十年前に生まれた経済学説を事改めて取上げるのも、こういう事情があるからであり、その最終的狙いはつねに現代の解明なのであります。勿論、古典派経済学には、当然のことながら、「帝国主義国」という考えはまだありません。古典派経済学の外国貿易論の問題意識は、最良の場合でも、「製造業の発達程度の異なる二カ国間の外国貿易はそれぞれの国にどういう利益を与えるか」であり、ですから、そこにおいて設定されている対立は、「先進国」対「後進国」の対立であります。しかし、前述の二つの収奪方法を捨象するなら、「帝国主義国」対「従属国」の対立は、**「先進国」対「後進国」の対立にまで抽象されている**といつてよいと思いますので、古典派経済学の外国貿易論が問題にしている対立的諸関係は、「帝国主義国」対「従属国」の対立、または、従属国に対する帝国主義国の収奪の最も抽象的な、最も基本的な、そして最も簡単な関係を表現しているといつてよいでしょう。勿論、ぎりぎりまで抽象されたところで事態を問題にしているのですから、そこでの結論から現代的問題についての示唆をえるには、いくつかの理論的媒介項を経なければならず、そのかぎりでの不完全さは考えに入れておかなければなりません。反面、その抽象が、空漠たる一般論へすすんでゆく形式論理的抽象ではなく、経済学の土台である価値論へとすすんでいった抽象であるが故に、そこにおいては事態がその核心において問題にされているということはいくれぐれも気に留めておいて頂きたいと思ひます。ですから私が今日古典派経済学の外国貿易論を問題にするという事は、とりもなおさず、資本主義世界における外国貿易の基本問題に言及するということになるわけです。

二

それにしてもみなさんは、古典派経済学の外国貿易論が何故にこのようなことをテーマにしたのか、その背後の発

想を知りたいとお考えになるでしょう。この点は、一体、古典派経済学は経済学の全体の中でどういう位置にあるのか、また古典派経済学の外国貿易論は外国貿易論の中でどういう位置にあるのか、要するに、古典派経済学および古典派経済学の外国貿易論の性格、すなわち、その意義と限界を明らかにすることになると思いますので、本論に入る前に、そしてまた本論への序曲として、この点について少し触れておきたいと思います。

私の思いますに、古典派経済学の外国貿易論を支えている基本的発想としては、それは古典派経済学の全般についてもいえることですが、次の三つを挙げることができます。

第一に、利得意識を上げることができます。およそ人間のいままでの歴史において、近代社会におけるほど、個人というものが重視され、またその個人の物質的利得というものが行動の主要原理として是認されるようになった社会はないように思われます。これは、結局のところ、生産力の一定の発展水準がそのような社会状態を求めたのであり、したがって逆からいえば、個人主義とか利己主義とかいうものは、歴史のある一定の時期にしか流行しない思想であることを意味しているわけでもあります。それはともかく、このような社会状況は学問の世界にも反映し、物質的富の利害関係を取扱う経済学が学問の中で大きな位置を占めるようになりました。そして経済学は、一方で、利得を求める個人の行動が、いかに結局において社会の福祉の増進にも役立っているかを語ることによって、無限の致富衝動に駆られて行動する市民社会の人間、資本家の行動を正当化するとともに、他方で、どういう行動をしたら可能なかぎり最大の富を獲得することができるか、国家または個人がそのさいに遵守すべき富の増進策を探究しました。古典派経済学はまさにそういう学問として成立したのです。たとえば、アダム・スミスは独占的・保護的な外国貿易に固執する重商主義に反対して自由貿易を主張するさい、自由貿易の方が一国の富をヨリよく増進するという形

で主張しました。利得問題が行動の第一原理である資本主義社会では経済学者はつねにこういう形で自分の提起した経済政策の正当性を証明しなければならなかったのです。そして市民社会の嫡出子である古典派経済学に一貫していたものはこの利得問題でした。ですから、外国貿易論を前述のようなテーマの下に展開したのも、彼らにしてみれば、ある事態またはある経済政策の下では誰が儲け誰が損をするか、経済学のすべての問題に共通して適用しているこの問題意識を外国貿易論の場面にも適用しただけのことでした。

ところで、古典派経済学の外国貿易論の性格をヨリよく知る上からも、古典派経済学のこのような性格が経済学の全体からみた場合どのような限界をもち、またどのような遺産をもたらしたか、について簡単に触れておきたいと思っています。まず、前者の限界についていえば、古典派経済学者は、結局、経済行動の主体に即してのみ考察するわけですから、そのような無数のブラウン活動の結果として、社会全体としての再生産はどのように進行するのか、社会的再生産の観点から経済現象を考える努力が乏しかったように思います。今日流行の言葉でいえば、ミクロの問題に集中してマクロの問題をおろそかにしていたわけです。古典派経済学者の目の前には、すでにケネーの経済表のようなすぐれた再生産論があったのですから、学問的刺激がなかったとはいえませんが、察するに、まだ激しい恐慌に悩まされていない当時であつては、また、社会不安を鎮めるために経済成長の問題に意識的に取組まなければならないなどということはまだ夢にも考えられなかった当時であつては、つねに資本主義社会の処方箋をかくために研究する彼らとしては、再生産論の方面に彼らの知力を振向ける社会的契機がそもそも存在していなかったのでしょうか。後者の、古典派経済学におけるこの利得意識の遺産についていえば、ある経済行為によって誰が儲けて誰が損をするかという観点からこの市民社会を露骨に分析した彼らは、結局、好むと好まざるとにかかわらず、その必然的結果として、市

民社会を対立的な姿で描くことになりました。そしてゆきつくところ、彼らは、資本家階級、土地所有者階級、賃金労働者階級という市民社会における三大階級ののびきならない経済的対立関係を語るようになったのです。市民社会のこのような描写はリカードによって最もあからさまにおこなわれましたが、そのことは、彼の意図に反し、「労働者が貧しいのは資本家が搾取するからだ」という社会主義者の主張に理論的正当性を保証することになりました。たとえば、イギリスの初期社会主義者、トマス・ホジスキンは次のように述べています。

「私がここにリカード氏の理論と定義とを引合いに出すのは、創造力に富み、思索の深いこの人の明敏さを例証したいと思うからではなく、彼の理論が、私がいま述べた考察、すなわち、資本家の搾取が労働者の貧困をもたらすということを確認しているからである。」(T. Hodgskin, *Labour Defended Against the Claim of Capital*, 1825, p. 80~1,

鈴木訳、六四頁)

こうなりますと、古典派経済学者の抱え主である産業資本家階級も黙っているわけにはゆかなくなりました。すなわち、彼らは、一方では、ミルのような折衷の名人を動員して市民社会の対立的性格を意識的に隠蔽させるとともに、他方では、凡百の俗流経済学者を動員して、いまや社会主義者から教師と仰がれているリカードを集中的に攻撃させました。たとえば、その一人、イギリスの経済学者、H・S・フォクスウェルは、アントン・メンガーの「全労働収益権史論」の英語版に付した序文の中で次のように述べています。

「私は社会主義の文献についての自分の研究がすすむにつれ、リカードおよびリカード派という名でみずからをよんでいる、有能ではあるがいくぶん頑固で偏狭な著作家たちの小集団が、経済学説を不幸に彩ったということの結果がどんなに影響力の大きいものであり、かつどんなに有害なものであるかについてますます深い印象を受ける

ようになってゐる。メンガー博士が明白に示してゐるように、近代の社会主義にその空想的な科学的基礎を与え、かつその革命的な形態を正当化しないまでも鼓舞したものは、リカードの生硬な一般論であつた。……彼の獨創的な、だが、おそらくは凝りすぎた論法は、その論拠となつてゐる假定が徹底的に抽象的であつた非現実的なものであつた。……それをすこしも顧慮しないで重大な實際問題を決定するのに躊躇なく適用される場合には、まったく有害であつた人心を迷わせるものとなつた。かくしてリカードは、ジェボンズが述べてゐるやうに、イギリスの経済学の全發展過程を不当にゆがめたのである。すなわち、リカードのために、イギリスの経済学は非歴史的かつ非現実的なものとなり、また、イギリスの経済学は、その科学的獨立性を失ひ、政治的党派の道具になつてしまつた。』(A. Menger, *The Right to the Whole Produce of Labour*, 1899, p. xl-xli, 森戸訳、二四四～五頁)

リカードの外国貿易論も亦、このような非難を浴びる性質のものであることは、のちにごらんに入れるとおりです。第二に、古典派経済学はこの資本主義社会を商品交換社会として把握しました。御承知のやうに、古典派経済学は、いまや自分の足で立つことが可能になつた産業資本のイデオロギーとして、重商主義の獨占的・保護的外國貿易に反対し、自由放任主義を主張しました。その場合、古典派経済学者は、單にイデオログとして自由放任主義を主張するだけではなく、理論家として、自由放任にしても事態は円滑に進行するであろうことを現實の世界の中で証明してみせる必要がありました。そこで持出されたものが商品交換社会、アダム・スミスの言葉でいえば、「商業社会 (commercial society)」という現實理解でした。要するに、この社会では、一見、お互ひに無關係に、無秩序な私的生産がおこつてゐるやうに見えるが、長い目でみると、商品価格の変動をとおして諸生産部門間の生産の均衡が保たれるやうになっており、したがつて自由放任にしても、過不足なく社会的再生産が円滑に進行するであろう、とい

うわけです。これは、ですから、近代社会の中に自然法的調和の完成を見出そうとする人にとっての経済学的証明でもあり、自由放任主義の理論的根拠でもありました。

しかし、現実の資本主義社会は決して商品交換社会と理解してすませるものではありません。第一に、こういう理解は流通過程にのみ着目しているわけですから、生産の場における資本と賃労働の対立がとかく無視されがちになり、資本家は商品所有者、よくても商品生産者ということになります。また、無視されない場合でも、資本賃労働関係はただ形態的に、流通関係とは無関係に、封建社会における封建領主と農奴との関係と同じように理解されることになります。しかし、資本主義的諸関係は、決して封建領主と農奴との関係が単に土地から機械制大工業の中に移行したものにすぎないと簡単に理解してすませられるほど単純なものではありません。第二に、この商品交換社会という理解では、彼らが着目している流通過程さえ正確に理解したことにはなりません。資本主義社会の特徴は、なにも生産の場においてのみ、すなわち、直接生産者が賃金労働者という形になっているところだけに表われているわけではありません。流通過程にも資本主義社会に特徴的なものが表われています。しかし、この商品交換社会という理解は、資本主義社会的なものは一切捨象し、流通過程を商品と商品との交換過程、いや生産物と生産物との交換過程として理解するわけですから、彼らにしたがえば、貨幣もまたその商品と商品との交換を媒介する単なる流通手段にすぎないということになります。しかし、いま、資本主義社会に独自のものとまではいわないにしても、現実の資本主義社会の流通過程でおこなわれているものは、商品と商品との交換ではありません。あえて交換という言葉を用いるならば、そこでは商品と貨幣との交換がおこなわれているのであります。そして人々は、賢明にも、商品と商品とではなく、商品と貨幣とが交換されているときには、いわゆる商品交換とは異質であることに気付き、「交換」で

はなく、「商品の販売」、「商品の購買」という別の言葉遣いをしているのであります。貨幣に即していえば、それは、現実には、流通手段としてではなく、購買手段として機能しています。ですから、流通過程を商品と商品との対立とみるか、商品と貨幣との対立とみるかは、また、貨幣を流通手段とみるか購買手段とみるかは、この資本主義社会を商品交換社会とみるか、それとも実態どおり資本主義社会とみるかの分れ目になるわけです。勿論、商品貨幣論の段階だけで資本主義的流通過程のすべてが論じられるわけではなく、資本主義社会に特徴的な流通過程の産物を問題にするにはそれなりの新たな追加的な努力が必要ですが、その努力はすべてこの商品貨幣理解にもとづいてのみ実りのある成果を挙げることができるとあります。ということは逆に云えば、商品交換社会といった理解では、資本主義社会の経済的諸問題、とりわけ、再生産上の諸問題を正しく理解することができないということです。たとえば、経済学は、資本主義的再生産の矛盾の集約的表現である全般的過剰生産恐慌の必然性を証明できるかどうかでその真価を問われるとよく云われておりますが、この商品交換社会論では、全般的過剰生産恐慌の不可欠の前提である商品の全般的過剰生産の形式的可能性すら証明することができません。すなわち、ここでは商品と商品とが交換されるのですから、商品の過不足はつねに相対的であり、したがって全ての商品が同時に過剰になることは論理的にありえません。ですから、J・B・セイやリカードが、この社会では商品の全般的過剰生産はありえないと述べたのは、資本主義社会の理解としては間違っていました。古典派経済学者としてはおのれの理論の論理的帰結をきちんと正直に語ったというべきでありましょう。要するに、商品交換社会論者には、また、古典派経済学者には、商品価値の実現とか販路問題とかいうことはそもそも問題にならないのです。一般的に、ブルジョア経済学のイデオロギー的使命は資本主義社会の弁護、ヨリ具体的には、搾取・収奪の弁護と再生産上の矛盾の隠蔽の二つにあります。古典派経済

学は全般的過剰生産恐慌を否定し、せいぜい部分的過剰生産しか生じそうもない永遠安定的な資本主義社会像を描くことによって、その使命のひとつを果たしたわけですから。

古典派経済学の外国貿易論は古典派経済学のこのような商品交換社会論がそのまま外国貿易の場に適用されたものです。世界を「大商業共和国」と考え、経済学における国境の意義を無視し、世界市場と国内市場とを少なくとも理論としては区別しなかった古典派経済学は、それ故になおのこと、なんの躊躇もなく商品交換社会論を外国貿易の場にそのまま適用しました。ですから、彼らは、まず、外国貿易を二国間の物々交換としてとらえました。現実の資本主義的外国貿易では、輸出する資本家は商品の販売を求めて輸出するのであり、販売代金である貨幣を「輸入」することはあっても、商品を輸入するとは限らない、ということなどは問題意識にのびりません。いや根本的な問題として、現実の資本主義的生産様式が再生産上の内部的矛盾を外部的場面の拡大によって克服する場として外国貿易を必然的に求めるなどということは、ここではそもそも問題になりません。彼らにとっては、外国貿易は必然の問題というよりは便宜の問題であり、販路問題などははじめから存在しないのであります。そしてそれは、単なる気まぐれ、理論的怠惰といった問題ではなく、彼らの資本主義社会観の論理的帰結であつたのです。なにごとにも率直な古典派経済学は、J・ミルの口をとおしてこの点を次のように明快に語っています。

「外国商業は、あらゆる場合において、必要上の問題というよりは、むしろ便宜上の問題なのである。外国商業の目的は、その国の産業の生産物に対する捌け口を提供することではない。なぜなら、その産業は、つねに自分自身に対する捌け口を提供しているからである。外国商業の目的は、われわれ自身の商品の一部を、われわれが国産品よりも愛するある他国の商品の一部とひきかえに交換することにある。」（J. Mill, *Commerce Defended*, 1808, p. 86, 岡

このようなつづりした理解に安住することによって彼らは、回収の心許ない対外貸付けを強行してまでも販路を拡張しようとする資本の致富情熱、その結果として、商品輸出が資本輸出へと展開されざるをえないことを理論化することなどは到底できませんでした。

第三に、古典派経済学は二商品の交換比率の量的な大きさを支えているものとして商品の中に労働を見出し、また。この発見は、察するに、「所有権の基礎は労働にある」、「ある物の所有権はそこに労働を投下した者に帰属する」という、私有財産権を正当化するさいの理論から導きだされたものなのでしょうが、この理論は両刃の剣となり、他方で、商品貨幣関係の中で搾取の問題を理論化する上で巨大な役割を果たしました。すなわち、一般に、搾取とは、とりもなおさず労働の搾取であります。労働そのものは対象化されておらず、目にみえることもありません。このことが搾取を隠蔽する主要な事情になるわけですが、それでも、封建社会におけるように、農奴が生産した米の一部分を封建領主が年貢として取上げる場合には、そこで搾取のおこなわれていることは誰の目にも明らかであります。それというのも、そこでは、一つだけの使用価値物に基づいて搾取関係が展開され、したがって、目に見えない労働の搾取が目に見える物の搾取という形で現象しているからです。ところが、資本主義社会のように、商品貨幣関係を媒介にして資本家と賃金労働者が関係を結び、その商品貨幣関係に多くの商品が交錯しているところでは、搾取関係に多種類の商品が介在しているため、たしかに資本家は利潤という不労所得をえているとはいえ、一体、そこで搾取がおこなわれているのかどうかということになると、どうもはっきりしません。したがって、この場合にも搾取のおこなわれていることを明らかにするためには、諸商品の中に或る共通物を見出し、しかも、「効用」といったよ

うな気まぐれで消費生活上のものではなく、生産と関連した共通物を見出す必要があったのです。古典派経済学者は、別段、そのような目的意識をもってしたわけではありませんが、自然法に影響された結果として、あらゆる生産物あるいは商品を労働の凝縮したものとして把え、労働をあれこれの労働ではなく労働一般として把えることによって、はしなくも、資本主義社会の中でも搾取のおこなわれていることを不完全ながら明らかにしました。ここでもまた、リカードは大きな功績を挙げています。

しかし、資本主義社会にしてみれば、古典派経済学者のこのような発言はどう考えてみても勇み足で、学問にあまりにも忠実すぎたということでした。元来、資本家階級は市民社会こそは人間の自由が最もよく保証されている最高の社会であると自画自讃していました。その社会に、彼らが闘争してきた当の相手の封建社会や奴隷社会と同じ搾取がおこなわれているといわれたのでは、資本主義社会の道義的基礎をゆさぶられているようなものであり、身もふたもありません。それに、こんな話をおおっぴらに語られては、自分たちがその存立の条件にしている賃金労働者の逆に増大させるばかりです。そこで資本家階級および古典派経済学者はリカード以後、これまでの方針を変え、経済学から労働および価値を追放し、価値と交換価値（価格）を意識的に混同させました。こうすれば、転々とする商品交換の連鎖の中に搾取の話を消え去らせることができるからです。こうしてその後今日に至るまで、ブルジョア経済学は一貫して労働価値説を無視乃至敵視してきました。ですからこのことを考えますなら古典派経済学、とりわけリカードが労働を中心に経済学を展開した功績は高く評価されなければなりません。こと搾取の問題に関しては、古典派経済学はブルジョア経済学の全歴史の中で彼らとして可能な範囲で最高の理論的成果を挙げ、それなりに経済学の宝庫の中に大きなものをもたらしました。

しかし、今日から考えますと、古典派経済学の「労働」理解は十分なものとはいえません。すなわち、彼らは、労働が一方では抽象的人間的労働として商品の価値を形成し、他方で、具体的有用的労働として商品の使用価値を形成していることを明確に定式化せず、いわんや資本主義社会ではこの二者が商品の中で対立し、そのため商品が二者闘争的性格をもっていることに気付きさえしませんでした。すなわち、彼らは資本主義社会を最高永遠の調和的社会と考えていたことと関連して、労働を「単なる労働」と一色に無矛盾なものとして把えました。ですから、その無矛盾な労働および商品からはなにも理論を發展させることができず、彼らは、流過程を商品と商品の交換過程と理解し、貨幣を、その商品流通を容易にするために外から導入された媒介物と理解しました。古典派経済学のこのような無矛盾な労働理解および商品理解に対して、マルクスは真正面から次のように批判しています。

「最初に、商品**は二者闘争的なもの、すなわち使用価値および交換価値として、吾々に現象した。のちに労働もまた、それが価値で表現されているかぎり、もはや、諸使用価値の生みの母としてのそれに属するのと同じ特徴を有たぬということがわかった。商品に含まれている労働のかかる二者闘争的な本性は、私によりはじめて批判的に指摘されたものである。**」(K. Marx, *Das Kapital*, 1867, Bd. I, S. 45~6, 青本文庫訳、第一分冊、一二三頁。なお、傍点は原文でイタリック字体の個所)

「かくして、商品のうちに包みこまれている使用価値と価値との内的対立は、ひとつの外的対立によって、すなわち二つの商品の関係——そこでは、**その価値が表現されるべき一方の商品は直接には使用価値としてのみ意義をもち、それで価値が表現される他方の商品はこれに反して直接には交換価値としてのみ意義をもつところの、二つの商品の関係——によって、表示される。**」(K. Marx, *a. a. O.*, S. 66, 青本文庫訳、第一分冊、二五五頁。なお、太字の個所

は原文でゲシュペルト印刷の個所）

このように、労働および商品という経済学の基礎的な範疇の中にすでに矛盾を見出すことによって、マルクスは現実の世界に即して資本主義社会を矛盾に充ち充ちたものとして描く基礎を確立しました。したがって、資本主義社会における労働を無矛盾なものとして把えるか、それともその中にすでに矛盾を見出すかには、資本主義社会を永遠なものとみなすか、それとも歴史的・一時的な社会とみなすか、資本主義社会観をめぐってのイデオロギー闘争の勝敗が賭けられているのであります。

このことは、勿論、そのまま、古典派経済学の外国貿易論にもあてはまります。すなわち、彼らは、たしかに、一方では、二国間における商品交換を単に物と物との交換とみるだけに終わらず、対象化された労働である価値の交換がその底でどうなっているかに注意し、そうすることによって、リカードにみられるように、外国貿易における不等価交換を示唆するという大きな成果を挙げることに成功しましたが、反面、他方では、その労働を無矛盾な塊と理解したため、商品の中における価値と使用価値との内部的対立を看過し、その内部的対立の外化として、流通過程は商品と貨幣との対立として把握されなければならないことに気がききませんでした。ですから、外国貿易論といつても物と物との外国貿易論にとどまり、国際金融とか国際金本位制とかいった、商品と貨幣との対立を基礎にしてはじめて説明される分野の外国貿易論には殆ど目を振向けず、振向けた場合でも貧弱な話しかできませんでした。それというのも、古典派経済学者はこの資本主義社会の再生産の調和性、永遠安定性をあまりにも簡単に信じきっていたからです。

第一章 二つの世界観——スミスとリカード

一

古典派経済学は、通常、アダム・スミスによってはじめて体系化されたといわれています。ですから私もまた古典派経済学の外国貿易論をスミスから始めることにします。

アダム・スミスは、その著「諸国民の富」の最初の方で、おもしろいことを述べています。

「実際のところ、もっとも富裕な諸国民は農業においても製造業においても、一般にそのすべての隣国民をしのいでいるが、かれらは前者よりも後者の優越性によっていっそう他をひきはなすのがふつうである。」(A. Smith, The

Wealth of Nations, 1776, edited by Cannan, Vol. I, p. 10, 岩波文庫訳、第一分冊、一〇三頁)

古典派経済学の外国貿易論の最良の点が、のちにリカードにおいてみられるように、この現実認識の産物であることを考えますなら、スミスのこの発言は、現実世界の実際の姿をありのまま語ったにすぎないものとはいえ、重要な意味をもっております。しかし、スミスは、この話をこれ以上発展させることなく、中途半端のまま終わりにしてしまします。それというのも、私の思うに、スミスは、現実の世界に対するこの理解が、彼の経済学の哲学的基礎になっている予定調和的世界観を攪乱する危険のあることを本能的に感じとったからです。スミスは、たしかに一方では非常に現実感覚の豊かな人間でしたが、他方ではそれにもまして自然法的調和感の持主でもありました。したがっ

て、現実世界から実際に学びとったものがすこしでも彼の調和感覚を搔乱す恐れがあると、すぐその現実認識を捨て去ったり、無害なていどにまで歪曲したりします。その場合、彼はその哲学そのままに素朴ですから、その理論的矛盾の隠蔽をなんのてらいもなく、いかにも不器用に、要領わるく、誰の目にもわかるような形でおこないます。

ところで、それでは、この現実理解を排斥し、予定調和的世界観に立脚した彼の経済学とは一体どういうものだったのでしょうか。まず、スミスにとって、一国の経済政策の目標は一国の富の増進にあり、そして、経済学はすぐれて政治経済学でなければならぬものでしたから、その経済学の課題は、国家がこの目標を達成するために最も合目的な政策手段を提示することにあります。ここまでは、彼が批判してやまなかった重商主義政策の目標および重商主義経済学の課題と同じであります。しかし、スミスは、先行の彼らと異なり、富を金貨銀貨においてではなく、生活必需品において理解しました。そのため、「一国の富を増進するに最も合目的な政策手段」もおのずと、重商主義政策とは異なったものになりました。すなわち、スミスによれば富とは生活必需品なのですから、富の増進とはとりもなおさず生活必需品の生産の増大であります。ここにおいてはじめて、経済学は生産の領域に入り、生産の分析に従事することになります。ところで、一般に、生活必需品の生産を増大させるためには、第一に、生活必需品を生産する労働者を、したがってまたその生産的労働者を雇用する資本を増大させなければなりませんし、第二に、その生産的労働者の労働の生産性を上昇させなければなりません。前者についていえば、そのためには、年々生産された富の内、できるだけ多くの部分を、私的消費ではなく生産的消費、すなわち蓄積に振向けなければなりません。ここから古典派経済学の主要な理論的帰結の一つであり、ケインズによって軽蔑されることになった勤儉貯蓄主義が導きだされます。後者の労働の生産性の上昇についていえば、現代のわれわれから考えるなら、その主要な改善策は生産手

段、とりわけ機械の改良であります。ところが、スミスの生活していた時代は、機械制大工業がまだ一般的とはいえず、「分業にもとづく協業」を基礎としたマニユファクチュアの支配的な時代でした。ですから、この時代にあつては、生産力の発展は主に分業がどのていど深化するかに依存していました。そしてその分業の深化を促進するものこそ、スミスによれば商品交換の発展でした。すなわち、スミスは、商品経済の発展→分業の発展→生産力の発展という因果系列で事態を理解し、したがって、商品交易の自由な発展こそ労働の生産力を発展させ、一国の富を増進させる捷徑であると考えました。ここから、古典派経済学のもうひとつの理論的帰結である自由交易主義が導きだされてきます。今日の私たちからみると、いささか「風が吹けば桶屋が儲かる」式の話ではありますが、幸運なことにマニユファクチュアの時代に生まれたばかりに、スミスは労働の生産性の向上と商品交易の自由な発展とを結びつけることができたのであります。

一国経済を念頭においた、経済学に関するこのような基本的な考え方が、スミスの場合にはそのまゝ、彼の外国貿易論の基礎になります。一般に、商品貨幣論、交換過程論、流通過程論とは別に、独自のな範疇として外国貿易論が成立するとされているのは、一般的な流通過程論に解消しきれない、または、一般的な流通過程論では説明のできないような独自の現象が外国貿易には存在すると考えられているからであります。すなわち、商品の運動、貨幣の運動が国境を越えておこなわれるばあいには、なにか屈折が生じている筈だと考えられているのであります。しかるに、スミスの場合には、国境が無視され、ですから、理論的には独自のなものとしての外国貿易論というものは成立していません。なるほど彼は外国貿易について語っています。また、外国貿易論の前提になる国家についても語っています。しかし、元来、国家というものは他国家の存在を前提とし、それとの敵対関係において成立するものですが、ス

ミスの国家にはそのような排他的な意味はなく、事実上、「社会」と同じ意味であります。そして、「国家」が「社会」として理解される以上、「国家」と「世界」、国内市場と世界市場、国内交易と外国貿易は同質だということになります。スミスは次のように述べています。

「もしすべての国民が自由輸出および自由輸入という自由な体系を採用するならば、一大大陸がさまざまの国家に分割されていても、これらの国家はこの点では一大帝国のさまざまな州に似たものになるであろう。」(A. Smith, op. cit., Vol. II, p. 47~8, 岩波文庫訳、第三分冊、二二六頁)

世界を「一大帝国」と考え、国内交易に關していえることは外国貿易に關してもそのままいえると考え、国内交易に關するスミスの考えはそのまま彼の外国貿易論の内容となります。すなわち、

第一に。国内交易同様、外国貿易においても等価交換の法則が作用している。

第二に。国内交易の自由な發展が一国の富を増進すると同様、外国貿易の自由な發展は諸国民の富を増進する。ところで、問題はこの第二の点であります。この点からアダム・スミスを有名にした自由貿易主義が導きだされてくるわけですが、自由貿易がいずれの諸国民にとつても利益であり、その富を増進するということを彼はなんとかかんとかして証明しようとしています。あるときには歴史的事実に訴えます。

「あらゆる都会も国も、その港をすべての国民に開放すればするほど、この自由貿易によって、商業の体系の諸原理がわれわれを導いて予期させようとしたとおりに破滅するどころか、それによって富んだのである。」(A. Smith,

op. cit., Vol. I, p. 522~3, 岩波文庫訳、第三分冊、二二六頁)

しかし、大切なのは、結局、理論的証明です。それは次のようなものであります。

「ある一国が特殊の諸商品を生産するうえで他国に対してもつ自然的長所は、ときによつてはひじょうに大であつて、これを克服しようと努力してもむだだということは全世界がみとめているほどである。……一国が他国に対してもつ長所が、はたして自然的なものであるかそれとも獲得されたものであるかなどということは、この点についてはたいしたことではない。一国がこれらの長所をもち、他国がそれらを欠如しているかぎり、つねに後者にとつていっそう有利なのは、自国でつくるよりも他国から買うということであらう。」(A. Smith, op. cit., Vol. I, p. 480, 岩波文庫訳、第三分冊、六一頁)

「もしある外国が、われわれ自身がある商品をつくりうるよりも安くつくり、それをわれわれに供給してくれることができるならば、われわれは、自分たちが多少とも強みをもつような部面で自国の産業を活動させ、その生産物の若干部分でそれを外国から買う方がよい。」(A. Smith, op. cit., Vol. I, p. 478-9, 岩波文庫訳、第三分冊、五八頁)

のちに検討するリカードが提起した問題は別にすれば、たしかに、他国の商品の方が安いなら、自国で生産するより他国からその商品を買った方が利益であり、それだけ一国の富も増進するといつてよいでしょう。だから自由貿易による利益ということは、結局、外国の安い商品が自由に買えるということに帰着します。しかし、外国の安い商品を買うためには、それに見合う、売るべき自国の安い商品がなければなりません。ですから、「自由貿易は利益になる」とか、「外国の商品の方が安かったら自由にそれを買えるようにした方がよい」とかいう考えの裏には、「各国はそれぞれなにか生産上の長所を必ずもっている」、いわば生産力の均等分布とでもいうべき世界観が存在しているのであります。実際、なんの長所もなく、外国から買うばかりで、外国に売る商品のなにもないような国にとつては、自由貿易は決して利益にはなりません。それに古典派経済学の物々交換的発想自体が、一方的自由貿易ではなく

相互的自由貿易を、したがってまた、各国は交換すべきなにかを必ずもっているということを、したがってまた、（各国への）生産力の均等分布を暗黙の前提にしているのです。アダム・スミスが、この節の冒頭において示したように、この世界の「生産力の不均等分布」について語りながら、結局ウヤムヤにしまったのも、もとはといえば、察するに、この現実認識が、「生産力の均等分布」を暗黙の前提にする彼のこの予定調和的世界観、および、その世界観に立脚した自由貿易の主張を根底からゆさぶることに本能的に気付いたからに違いありません。

さて、これで、結局、アダム・スミスが自由貿易を主張するとき、その底に抱いている予定調和的世界観の内容がわかりました。すなわち、彼の頭の中に映じたこの世界では、第一に、等価交換の法則が作用しており、第二に、生産力は各国に均等に分布されています。ですから、たしかに、こういう世界観を前提にするなら、自由貿易とは相互的自由貿易のことであり、また、自由貿易が発展すればするほど、諸国民の富もまた増進することになります。ただ、問題は、この世界観が正しいかどうかであります。

スミスの世界観についてこの二点を確認した上で、次に、スミスとの対比において、リカードにすすみたいと思います。

二

リカードのよい点は、すべて、彼が、ブルジョア経済学者として可能なぎりぎりのところまで、現実的であったところにあります。リカードの理論にスミスのようなバラ色の予定調和感がないとすれば、それはとりもなおさず現実の資本主義社会にそもそもそういうものがないからであります。また、リカードの理論がこの社会をあまりにも対立

的に、かつ悲觀的に描いているとすれば、それはとりもなおさず現実の資本主義社会がそうだからです。リカードの理論には、スミスの理論をあたかく包んでいるような夢は期待すべくありませんが、勝手な先入観にとらわれていないだけに、科学としては、スミス以上に大きな成果を挙げることができました。このことは価値論のみならず、ここ外国貿易論についてもいえます。

リカードが外国貿易論をすすめるさい、根本に抱いた問題意識は、「製造業の発達している国は概して農業についても外国より発達しているのに、その穀物価格は外国のそれより高く、したがって外国貿易を自由にするなら、生産性の低い外国の穀物（したがって、本来ならヨリ高価で輸入できない筈なのに）が輸入されるようになるのは何故か」ということでした。この点について、リカードは、その原因を説明したあとでの言葉ですが、次のように述べています。

「したがって、機械および熟練においてかなりの優位を有し、それ故に諸貨物を隣国よりもはるかに少ない労働で製造しうる国が、これらの貨物と交換に、その消費のために要する穀物の一部分を、自国の土地が穀物の輸入先のその国よりも肥え、穀物をヨリ少ない労働で生産しうる場合にも、なおかつこれを輸入しうるであろうということ は明らかである。」(The Works of D. Ricardo, Vol. I, p. 136, 岩波文庫訳、上巻、一三四頁)

この原因を説明するためにリカードが挙げた例示は、表にして示すならば第1—1表のようなものであります。この表は、スミスとの対比においてみますならば、次の二つのことを語っています。

第一に、スミスの自由貿易論がその基礎にしていた生産力の均等分布の世界観とは異なり、リカードは生産力上の優位が一方の国に偏っているものとして世界をとらえています。いわば、生産力の不均等分布という世界観を抱いて

第1-1表 リカードの把握した
資本主義世界
(単位：商品1単位を生産する
に要する労働者数)

	ラシャ	ブドウ酒
ポルトガル	90	80
イギリス	100	120

ら、外国貿易論は必ずこの事態をふまえなければならぬのであります。

第二に、これは実質的には第一の点と同じ話ですが、リカードが示したこの表は、スミスが「諸国民の富」のはじめの方で語ったことをそのまま表にしたものであります。生産力上の優位が一方の国に偏っていることといい、その生産力上の優位の程度に差異をつけたことといい、それはスミスが思わず知らず述べたことと同じであり、いわば、それを表にしたものであります。リカードがこのような数的関係を例に持ちだすとき、スミスのこの話を念頭においていたのかどうかは、リカードがなにも語っていませんのでなんともいえませんが、それはどうであれ、彼の外国貿易論は私がこの章の冒頭に示したスミスの話を土台にしており、結局、彼のしたことは、スミスのこの話を土台にするかどうかということが論理的帰結として導きだされるか、その点を明らかにしたところにあるといってもよいのであります。

さて、このような世界認識の下にリカードが問題にしたことは、このように、生産力上の優位が一方の国に偏っているにもかかわらず、現実には相互的外国貿易がおこなわれているのは何故か、ということでした。実際、ポルトガルはラシヤの生産にもブドウ酒の生産にも優れているわけですから、一国内での問題としていえば、すなわち、そこに等価交換の法則が作用しているものならば、ポルトガルはラシヤもブドウ酒もイギリスへ輸出し、イギリスは輸入するばかりで輸出するものはなにもない、すなわち、一方的外国貿易になる筈です。ところが、現実には、イギリスはラシヤを輸出している、したがって相互的外国貿易になっている、というわけです。これは何故なのか、リカードはここに外国貿易論の焦点をあてます。ここへ来て私たちはスミスの相互的外国貿易論を支えている二つの前提をもう一度思いおこしてみたいと思います。そのさい述べましたように、それは、「一国内におけると同じ意味での等価交換」と「生産力の均等分布」の二つの柱を前提としています。この二つの前提の下ではじめて相互的外国貿易は成立するとロマンティストのスミスは考えているわけです。しかしアリストのスミスが直感的には気付いていましたように、そしてまたリカードが露骨に問題にしましたように、生産力は各国に均等に分布されていません。ということ、スミスの相互的外国貿易論を支えている二つの前提の内の一つは非現実的で誤りだということです。しかし、それなら、その二つの前提の上に成立している筈の、したがってその内の一つの前提が否定されるなら同じく否定される筈の相互的外国貿易が、現実には、それにもかかわらず存在しているのは何故なのか、問題はぎりぎりのところまで追詰められてきました。ここに至ってリカードは思い切って清水の舞台から跳びおります。「それは、もうひとつの前提である等価交換ということが外国貿易ではおこなわれていないからだ」と。それがいかに人々の旧来の常識に反していようと、彼は論理の指示するところに忠実に従います。実際、生産力上の優位が一方の国に偏っている

のに相互的外国貿易がおこなわれているとすれば、相互的外国貿易のもうひとつの前提である等価交換を否定するより他ないのですから。リカードは、彼一流の独断的な表現ではありませんが、この点を次のように述べます。

「一国内において諸貨物の相対価値を支配するのと同じ規則は、二国もしくはそれ以上の国々の間に交換される諸貨物の相対価値を支配するものではない。」（The Works……of D. Ricardo, Vol. I, p. 133, 岩波文庫訳、上巻、一三一頁）

スミスが「諸国民の富」のはじめの方ではじめて外国貿易論をすぐにウヤムヤにしてしまった理由もここへきてはつきりしました。要するに、それはスミスのロマンティックな世界観とそれにもとづいた万国繁栄の外国貿易論を真向から否定する毒を含んでいたのです。敏感な彼はそれを本能的に感じ取り、それ故に、慌わてて話を他へ逸らせたのでしょう。リアリストとしてのスミスを受継いだリカードの外国貿易論は、スミスのこの辺の心理的動きをあからさまに物語っています。

第二章 二つの比較生産費説——リカードとミル

一

前章においてみましたように、リカードは外国貿易においては、国内交易におけるのとは異なった法則が作用していることを示唆しました。それでは具体的にいつてどういう法則が外国貿易に作用しているのか、その点がこの章でまず問題になりますが、その点についてのリカードの説明の批判的分析に入る前に、私はリカードが例示に用いてい

る前掲の表（第1——1表）の性格をまずはっきり確認して、形式的なことですがいくつかの修正を施しておきたいと思ひます。

第一に。これらの四つの数量の単位ですが、リカードは言葉の上では、「一定量の生産物を生産するに必要な年間労働者数」ということで述べています。しかし、理論を展開するためにこれらの数字を用いているそのときの用方をみますと、實際問題としては、「生産物の一定量に含まれている価値量」を考えています。私たちにしてみればこの二つははっきり異なつた単位ですが、リカードの頭の中では、後者を前者として表現したまでの同一事なのです。他の古典派経済学者と同じく、リカードは第一に労働力と労働の区別が十分でなく、第二に商品価値における不変資本部分Cを理論上無視してしまつたため、第一に労働の大きさを労働者数で表現し、第二に商品価値の大きさをそこへ投下された生きた労働のみで考えます。ですから、「生産物の一定量に含まれている価値量」を「一定量の生産物を生産するに必要な年間労働者数」と表現してもなんの矛盾も感じなかつたのであります。

第二に。リカードは、ラシヤ、ブドウ酒の価値量が一体どれだけの生産物量についてのものなのか、その点についてなにも語っていませんが、これは便宜上決めておいた方がよいかと思ひます。そこで、これは全く仮定の話ですが、これらの価値量は、ラシヤ一ヤード、ブドウ酒一リットルについてのものだとすることにします。なお、このことに関連して念のために述べておきますが、リカードの四つの数字の内、八〇と九〇、一二〇と一〇〇との間にはなんの意味もありません。何故なら、それはそれぞれの商品の使用価値一単位の大きさにかかつてゐることであり、それ自身は仮定の話として任意に決めたのだからです。たとえば、私たちはラシヤの一使用価値単位を一〇ヤードとすることもできるわけで、その場合には、八〇対九〇は八〇対九〇〇に、一二〇対一〇〇は一二〇対一〇〇〇になります。

すが、そうであってもこの表の理論的性格および結論の量的関係は一向に変わりません。

第三に。前の二つはこの表の理論的性格についての確認でしたが、これからの二つはこの表に対する形式的な修正であります。すなわち、一般に、生産力水準が高くなればなるほど一定量の生産物を生産するに必要な労働量が少なくなり、したがってその生産物の価値は小さくなります。その点を考慮してリカードの表をみますと、ロシア、ブドウ酒とも、ポルトガルのそれらの方がイギリスのそれらよりも価値が小さくなっていますから、この表では、ポルトガルはロシア、ブドウ酒のいずれの生産にもすぐれている先進国、イギリスは後進国ということになります。しかし、実際の世界は、私がいまさらいうまでもなく、この逆で、イギリスの方がポルトガルよりも先進的な国であります。そこで、話をすこしでも現実世界の状態に即してすすめるために、単なる形式的変更であって、この表のもっている理論的性格をなんら変更するものではありませんが、イギリスとポルトガルの地位を入替え、イギリスを先進国、ポルトガルを後進国の地位におきたいと思います。

第四に。一般に、一国の産業構造の高度化の度合を示す商品ほど、二国間における生産力格差が大きい、したがってまた価値格差が大きいと考えることができます。その点を考慮してリカードの表をみますと、イギリス、ポルトガルの二国間の生産力格差は、ブドウ酒の方がロシアよりも大きいわけですから、ブドウ酒が先進的商品、ロシアが後進的商品といえますか停滞的商品ということになります。しかし、この点もまた、実際の世界でいえば、私がいまさういうまでもなく、どちらかといえば、ロシアの方がブドウ酒よりも先進的商品であります。そこで、これまた話をすこしでも現実世界の状態に即してすすめるために、単なる形式的変更でこの表のもっている理論的性格をなんら変更するものではありませんが、ロシアとブドウ酒の地位を入替え、ロシアを先進的商品、ブドウ酒を後進の商品の地

位におきたいと思います。

リカードが何故に現実の世界とは二重に逆の、こうまで手のこんだ表をつくったのか、その真意は、リカードがなにも語っていない以上、本当のところはわかりません。すこし話を先走っていえば、この表を用いてポルトガルがイギリスを搾取していることを示し、そうすることによってイギリスの経済学者らしく、イギリスがポルトガルを搾取している現実を隠蔽しようとしたのだと勘繰ることもできないではありませんが、それはともかく、この二つの形式的修正を施してリカードの表を再構成するなら、それは第2—1表のようになります。そこで私は以下この表を例にとって話をすすめてゆきたいと思います。

さて、リカードが外国貿易論において問題の焦点に据えたことは、生産力分布がこのような状態、すなわち、生産力の優位がイギリスの方に一方的に偏っている状態でもなおかつ、相互的外国貿易になるのは何故か、または同じことを

第2-1表 価値表
(単位：ラシャ1ヤール、ブドウ酒1リットルの価値量)

	ラシャ	ブドウ酒
イギリス	80	90
ポルトガル	120	100

異なった言葉でいえば、ポルトガルのブドウ酒がイギリスに輸出されるのは何故か、その現実を理論的に説明することでありました。この場合、リカードの説明は必ずしもはっきりしたものではありませんが、リカードおよびその後の古典派経済学者はポルトガルのブドウ酒がイギリスに輸出される根拠を物々交換的に説明して、イギリスのラシャ製造資本家にとってラシャをイギリスのブドウ酒と交換するよりはポルトガルのブドウ酒と交換する方がより多くのブドウ酒を獲得することができるので、ポルトガルのブドウ酒の方を望むからだ、と説明しました。すなわち、第2—1表に示された価値関係にもとづいて両国における二商品の物々交換比率をそれぞれ計算しますと、第2—2表のよう

第2-2表 物々交換表
(単位：ラシャ1ヤール，ブドウ酒1リットル)

		ラシャ	ブドウ酒
I)	イギリス	9	8
	ポルトガル	5	6
II)	イギリス	45	40
	ポルトガル	45	54
III)	イギリス	54	48
	ポルトガル	40	48

になります。この表のⅡおよびⅢは物々交換の損得関係をただわかりやすくするために作成したままで、質的にはⅠと全く同じであります。この表を用いて先の説明を繰返すなら、イギリスのラシャ製造資本家は、本国でならラシャ四五ヤールと引換えにブドウ酒四〇リットルしかえられないのに、ポルトガルのブドウ酒との交換なら五四リットルえられますから、ポルトガルのブドウ酒との交換、すなわち、ポルトガルのブドウ酒をイギリスへ輸入することになる、というわけです。この説明は、このかぎりでは論理的にいつて間違っておりません。しかし、問題は、資本主義社会にお

ける現実の外国貿易は物々交換ではないということであります。ですから、物々交換的に考えてうまく説明できたとしても、現実の外国貿易についての説明がそれで十分かどうかはまだなんともいえません。私たちは、現実の外国貿易においては貨幣が介在し、価格関係の下に商品が運動し、ひとつひとつの取引が独立しておこなわれているということを考慮に入れなければなりません。そしてその点から考えると、さきほどの物々交換の説明も大分怪しいものになります。たとえば、私たちは、第2—1表に示された価値関係にもとづいて第2—3表のⅠのような価格関係を考へることができます。これは、アダム・スミスが空想したように、世界が様な価値圏にあると考へての表で、イギリスでもポルトガルでも一労働時間が一シリングと評価されています。この場合でも、さきの物々交換の説明は、勿論、成立しますから、それからゆけば、ポルトガルのブドウ酒はイギリスに輸出される筈です。ところが、現実の価格関係の世界でいえば、一体、ある国のある商品が他国へ輸出されるのは、その商品の価格が他国の同種商品の価格よ

第2-3表 価 格 表
(単位：シリング)

		ラシヤ	ブドウ 酒
I)	イギリス ポルトガル	80 120	90 100
II)	イギリス ポルトガル	88 120	100 100
III)	イギリス ポルトガル	96 120	108 100
IV)	イギリス ポルトガル	120 120	135 100
V)	イギリス ポルトガル	136 120	153 100

り安いからであります。いま、輸送費は考えないことにして、ですから、この場合でも、ポルトガルのブドウ酒がイギリスへ輸出できるためにはそのブドウ酒の価格がイギリスのそれより安いということが条件になります。しかるに第2—3表のIに示されているように、現実にはポルトガルのブドウ酒の価格はイギリスのブドウ酒の価格よりも高い、したがってポルトガルのブドウ酒はイギリスへ輸出できないのであります。実際、イギリスのラシヤ製造資本家にしても、物々交換的にはいくらポルト

ガルのブドウ酒を獲得した方が利益であろうとも、このような価格関係の下では、ポルトガルにラシヤを輸出はするものの、その代金は本国へ持って来て母国イギリスのブドウ酒を買うことに利益を見出すでしょう。たとえば、イギリスのラシヤ製造資本家はラシヤ一ヤールをポルトガルへ輸出して一二〇シリングで販売します。その代金でポルトガルのブドウ酒を購買するならそれを一・二リットル購買することができます。しかし、物々交換経済のときと異なり貨幣経済の下では、各取引は独立しており、イギリスのラシヤ製造資本家はポルトガルのブドウ酒を入手することを強制されていません。彼はポルトガルで販売したラシヤの代金を本国のイギリスへ持って帰ることができます。そしてイギリスのブドウ酒はポルトガルのそれより安く、彼はラシヤ一ヤールの代金で一・三リットルのブドウ酒を入手することができるのでから、実際にもそうするでしょう。すなわち、イギリスのラシヤ製造資本家はラシヤをポルトガルに輸出はするが、ポルトガルのブドウ酒を輸入することはしない。ですから、物々交換の世界で考え

ると輸出できたのに、価格の世界で考えると輸出できなくなる、ここに物々交換的説明のひとつの陥穽があります。そして私たちは物々交換の世界ではなくて価格の世界に住んでいるのですから、両者の間に矛盾の生じたときには後者を採用するよりほかありません。ですから、第2—1表に示されたような価値関係の下でなおかつポルトガルのブドウ酒がイギリスへ輸出されうるとすれば、それはポルトガルのブドウ酒の価格がイギリスのブドウ酒の価格より安いから、たとえば、第2—3表のⅢのような価格関係になっているからであります。この価格関係の下では、イギリスはラシャを輸出し、ポルトガルはブドウ酒を輸出し、と物々交換の世界でおこなった説明と同じことが生じます。

ところで、この場合問題になりますことは、こういうことが成立するためには、イギリスのブドウ酒の価格が一〇シリング以上であること、たとえばここで示したように一〇八シリングでなければならぬということであります。すなわち、ポルトガルのブドウ酒の方は第2—3表のⅠ同様、一労働時間当り一シリングの割合で評価されているのに、イギリスのブドウ酒の価値の方は九〇労働時間の価値量が一〇八シリング、一労働時間が一・二シリングとポルトガルのブドウ酒の価値に比して二〇%割増の評価をうけていることでもあります。勿論、事柄の性格はこの場合相対的なものでありますから、ポルトガルのブドウ酒の価値の方が割引評価をうけているといってもよいわけですが、つねに二通りの表現をするのもうっとうしいですから、イギリスのブドウ酒の価値が割増評価を受けているという表現に統一します。それはともかく、イギリスのブドウ酒を対象化されている労働が割増評価をうけているということは、外国貿易に特徴的な事態としてきわめて重視すべきことであります。

ところが、価値のこの割増評価は、イギリスのブドウ酒という一商品にのみ生じていることではありません。私がいまさら述べるまでもなく、イギリスとポルトガルとは別々の通貨制度の下にあり、イギリスはポンド、ポルトガル

はエスクードを貨幣單位の名称としております。したがしまして、こういう事態の下では、二国間における一商品の価格の大きさの比較は、直接的ではなく、ポンドとエスクードの為替相場を媒介にして間接的にこなわれます。ということは、一国の価値と他国の価値の比較は商品毎に個々におこなわれるのではなく、国家單位の規模で二国間の価値の比較がまずおこなわれ、その比較によってえられる比率を媒介にして、二国間の個々の商品の価値の比較がおこなわれているのであります。すなわち、イギリスのブドウ酒の価値が二〇%の割増評価をうけているとすれば、それはとりもなおさず、そもそもイギリスの価値が全体としてポルトガルの価値に比して二〇%の割増評価を受けており、そのことがブドウ酒という一商品に反映しているのであります。ですから、私たちはイギリスの価値のこのような割増評価はひとりブドウ酒のみでなく、ラシャにも生じていると考え、ラシャの価格も八〇シリングから九六シリングへと二〇%高い水準にあるものと考えなければなりません。イギリスの商品は全体としてその価値の二〇%の割増評価を受けた価格水準で世界市場に存在しているというわけであります。第2—3表のⅢはその場合の価格関係を示しています。ですからこういう価値関係と価格関係においてイギリスとポルトガルの間に外国貿易がおこなわれますなら、そこにおいては国家的規模において不等価交換がおこなわれ、この不等価交換において、生産力のより高いイギリスは得をし、生産力のより低いポルトガルは損をするのであります。この点をリカードは相変わらずぶっきらぼうに、損得問題とは無関係かのように次のように述べています。

「かくのごとくして、イギリスは、八〇人の労働の生産物に対して、一〇〇人の労働の生産物を与えるであろう。」
(The Works... of D. Ricardo, Vol. I, p. 135, 岩波文庫訳、上巻、一三三頁)

この数的関係は私たちの修正した第2—1表でいえば、「イギリスは一〇〇の価値に対して八〇の価値を与える」

というべきでしょうし、第2—3表のⅢに即していえば、「イギリスは六の価値に対して五の価値を与える」ということになりますが、それはともかく、リカードが「外国貿易においては国内交易におけるのとは異なった法則が作用している」と述べたとき、その具体的な内容はこういうものだったのです。

ところで、リカードのこの結論は、旧来のアダム・スミスの外国貿易論、予定調和的世界観に対する決定的な批判を示唆しています。とかく人々は、自由貿易が完全におこなわれるなら、また各国の通貨が同じ貴金属、たとえば金を基礎にしているならば、世界市場は一国の国内市場と同じである、すなわち、そこでは等価交換がおこなわれていると考えがちです。しかるに、実際には、たとえ完全に自由貿易がおこなわれているようにとも、また、各国が同じ貴金属、たとえば金を通貨の基礎にしているようにとも、通貨制度が国毎に異なっている以上、その世界市場は一国の国内市場と同じではないのであります。すなわち、世界市場においては、国家間の生産力水準の格差に応じて、または、各国家の生産力水準の高さに応じて、国家単位で諸国家の価値は割増評価を受け、それにもとづいて価格関係が成立しているのです。ですから、ここでは一国の国内市場のような等価交換がおこなわれているわけではなく、不等価交換が、しかも独自の通貨制度を採用している国家単位の規模で不等価交換がおこなわれ、生産力のより高い国がこの交換から利益をえ、生産力のより低い国は損をしているのであります。この結論が私たちの目撃している現象といかに異なっているようにとも、この理論の前提である、生産力の不均等分布と相互的外国貿易の現実を承認するかぎり、この結論は、この二つの前提の論理的帰結にすぎないのでから、承認せざるをえません。マルクスが述べているように、科学が常識と同じものなら、科学をわざわざ研究する必要など殆どないのであります。それにしてもリカードのこの理論的功績は決定的に巨大なものがあります。価値論同様、ここ外国貿易論においても、彼は経済学の宝庫に多くの

ものをもたらしたのであります。そしてこのことが他方でブルジョア社会から「不和をまきおこす人」として嫌われる原因にもなったのであります。

勿論、リカードの叙述を實際にみて頂きますとわかりますように、リカードの話は、独りよがりな断定的で、論理の筋が度々とんでおり、また、のちにみるミルにつらなる俗流的な話をしていたりして、お世辞にもよくまとまっているとはいえません。たとえば、

第一に。さきにも述べましたように、リカードの外国貿易論はアダム・スミスの外国貿易論、すなわち彼の自由貿易万国繁栄論に対する批判を示唆しています。ですからその点を十分に自覚しているなら、自由貿易を手放して礼讃することなどできない筈です。ところが、リカードにはこの点の理論的自覚がないようで、次のように、スミスばりの自由貿易万国繁栄論を無雑作に述べています。

「完全な自由貿易制度の下においては、各国は自然にその資本と労働とを、自国に最も有利になるような用途に捧げる。この個人的利益の追求は、見事に全体の普遍的利益と結びつけられる。勤勉を刺激することにより、工夫に酬いることにより、また自然が賦与せる特殊の力を最も有効に使用することによって、それは労働を最も有効、最も経済的に分配すると同時に、総生産額を増大させることによって、一般的福利を普及せしめ、利害と交通との一条の共同紐帯を以て、全世界文明を通じて諸国民を一個の普遍的社會に結合させる。」(The Works of D. Ricardo,

Vol. I, p. 133~4, 岩波文庫訳、上巻、二三二～二三頁)

第二に。リカードは国内交易と異なつて外国貿易では不等価交換の生じる根拠を、すなわち、理論面からいうなら、一般的な流通過程論には解消しきれず外国貿易なる範疇が成立する根拠を、世界市場における資本の移動の困難

性に求めます。たしかに、この点は大事な点で、一国市場におけるほど速かには資本は世界市場においては移動しません。ですから生産技術の普及も世界市場においては一国市場におけるよりも遙かにそのテンポのおそいのが現状です。したがって、問題を理論的に取扱う場合でも、一国市場においては、ある生産部門において生産技術上の差異のない状態を基本に考え、その生産部門内における生産技術上の差異の問題は、その基本的理解の上に立って、経過、第二義的なものと考えてのに対し、世界市場においては、生産技術上の差異を基本的な状態として設定しなければなりません。これは、リカードの時代にくらべれば、はるかに資本の国家間の移動が円滑になった現代についてもあてはまります。ですから、リカードのこの指摘はこれはこれで正しいものをもっていますし、今日においても妥当します。しかし、問題はそれだけでは外国貿易論の成立する根拠として不十分である、ということにあります。ということは、生産力の不均等分布ということが世界市場に存在していても、もし、通貨制度が各国バラバラではなく世界的に統一されていたとするなら、第2—3表のⅠのような価格関係が世界市場において成立するわけで、これではとくに外国貿易を独自の考える必要はなくなります。また不等価交換も成立しません。統一した通貨制度の下における一国市場の中では地域間にいくら生産力水準の格差が存在していても、リカードのいうような意味での不等価交換は成立しません。ですから、イギリスとポルトガルの間不等価交換が成立するためには、すなわち、第2—3表のⅢのような価格関係が成立するためには、（資本の国際的移動の困難にもとづく）生産力の不均等分布ということだけではなく、それに付け加えて、通貨制度が異なっているということがなければなりません。このことがあるからこそ、第2—1表のような価値関係が第2—3表のⅠではなくⅢのような価格関係となって現われるのです。為替相場は異なる通貨の単なる換算レートの問題ではありません。その換算の過程で生産力格差に応じた価値の

割増評価がおこなわれているのです。そういうことがあればこそ、一般的な流通過程論に付け加えて独自の外国貿易論が問題にされなければならない理由があるのです。一般に通貨問題に弱いリカードはここにおいても異なる通貨制度のもっている問題を理論化することができませんでした。

第三に。リカードはイギリスがロシアを輸出し、ブドウ酒を輸入するようになる生産力上の事情を次のように述べています。

「イギリスはロシアを生産するのに一年間一〇〇人の労働を要し、またブドウ酒を醸造しようと試みるならば、同一時間にわたって一二〇人の労働を要するような事情の下にあるものとしよう。したがってイギリスはブドウ酒を輸入し、そしてロシアの輸出によってブドウ酒を購入することを利益とするであろう。」(The Works... of D. Ricardo,

Vol. I, p. 135, 岩波文庫訳、上巻、一三三頁)

私がまえにも述べましたように、そしてリカードも実際にはそうしていますように、イギリスがロシアとブドウ酒のどちらの商品を輸出するようになるかは、相手国におけるその二商品の交換比率(物々交換的発想をみとめるとして)との関連においてはじめて決まるのであって、イギリス一国内の二商品の交換比率だけで決まるものではありません。しかるに、リカードの説明は、この表現だけで問題にするかぎり、イギリスにおける二商品の価値関係、物々交換比率だけで、ロシアの輸出が決まるように述べています。勿論、リカードの頭の中では相手国ポルトガルの事情との比較がおこなわれているのでしょう。しかし、リカードの話はいかにも論理不連続、唐突、不親切です。リカードの理論が有している画期的な意義を考えるなら、俗流的な方向に話が歪曲されるのを防ぐ意味からも、もうすこしいねいに話をすすめていった方がよかったのに、と思います。

第四に。これは古典派経済学者に一般的なことで、また彼らが取扱ったどの分野でもそうなのですが、リカードは彼の外国貿易論で不等価交換を説明するさいに、物々交換的発想でそれをおこなっています。あの方へゆきますと、貨幣を、すなわち価格を入れて外国貿易を考えようになりますが、これは別の問題をも含んでおりますので第三章で分析するとして、とにかく物々交換的説明の範囲で不等価交換を説明しています。このため、第一に、外国貿易における価値と価格の関係の問題が不鮮明になり、第二に、外国貿易における国境のもっている意味が見失われてしまっています。のちに検討するミルと異なり、古典派経済学お得意の物々交換的説明のさいにも、その底に労働および価値の存在していることを忘れず、したがってまた、そこから不等価交換を導きだしたことはリカードの大きな功績でしたが、欲をいえば、価値関係と物々交換関係との対比の中からではなく、価値関係と価格関係との対比の中から不等価交換を導きだして欲しかったと思います。そうすれば、イギリスのラシャとポルトガルのブドウ酒との不等価交換の背後には、一般に、イギリスの価値とポルトガルの価値との不等価交換が存在していること、すなわち、外国貿易においては国家的規模で不等価交換のおこなわれていることがまず指摘できたに違いありません。しかし、これは後世の人間の勝手な注文ともいふべきもののようで、リカードが先行の経済学者に対して示したその飛躍的な歩み、そのさいの悪戦苦闘ぶりをみるなら、不等価交換を探り出したのが精一杯、それ以上のことは望むべくもなく、リカード自身も、ひらめきのある見解を述べるそばから、次のようなお粗末な話もしています。

「二人の人があって二人とも靴と帽子をつくることができ、そして、一方の人がいずれの仕事においてもヨリすぐれているが、帽子の製作においては、彼は競争者より五分の一、すなわち二〇パーセントしかすぐれておらず、靴の製作においては三分の一、すなわち、三三パーセントすぐれている場合、そのすぐれている人が専ら靴の製作に

あたり、劣っている人が帽子の製作にあたることは両者双方の利益ではないだろうか。〔The Works……of D. Ricardo, edited by Sraffa, Vol. I, p. 136, 岩波文庫訳、上巻、二三四頁〕

一体、ここには、国内交易とは区別されたものとしての外国貿易を問題にしているのだという意識すらありません。もし、国内交易なら、そこでは等価交換の法則が支配するのですから、「劣っている人が帽子の製作にあたる」ことはないでしょう。国内交易では生産力水準と価格とは反比例関係にあり、したがって高い生産力水準を有している人ほど低廉な価格の商品を生産でき、市場を支配できるのでしょうから、靴の製作にもすぐれている人は靴の製作にも帽子の製作にも携わるでしょう。外国貿易だからこそ、劣っている人の製作した帽子の方が低廉になるのだ、という点がこの話からでははっきりしません。ですから、外国貿易論は、このように物々交換的な形で展開すると、うっかりすれば単なる遠隔地交易論に歪曲される危険があります。それに、こういう生産力関係の下で外国貿易がおこなわれるときには、前にも述べましたように、不等価交換がおこなわれ、優れている国は劣っている国を搾取します。ですから、「両者双方の利益」などとは到底云えません。リカード自身もすぐ前の個所ではそのことを示唆していた筈です。ところが、リカードはいまはもう価値のことはすっかり忘れ、価値を抜きにした全くの物々交換的発想で外国貿易を考えます。これは、後に示すように、J・S・ミルの発想です。そして、労働を捨象したこういう考え方の上に立てば、たしかに外国貿易が「両者双方の利益」になることは至極当然のことです。

第五に。リカードはイギリスのラシャとポルトガルのブドウ酒の不等価交換の比率として、「ポルトガルの八〇人の労働に対してイギリスの一〇〇人の労働」、私が修正した第2—1表でいえば、「ポルトガルの一〇〇〇の価値に対してイギリスの八〇の価値」という量的関係をあげていますが、どうやってこの比率が導きだされたのか、なにも説明

していません。この比率は物々交換比率でいいますと、イギリスのラシャ一ヤード対ポルトガルのブドウ酒一リットルにあたり、ラシャとブドウ酒が丁度一對一で交換されることになりましたが、何故一對一で交換されるのか、かんじんのところがはっきりしていません。それどころか、一對一でなく交換されることも十分にありえます。第2—3表をみて頂けばわかりますように、イギリスとポルトガルの間で相互的外国貿易がおこなわれるためには、価格関係はⅡとⅣの間で成立していればよいわけです。ということは、イギリスの価値の割増評価は一一%（Ⅱ）から五〇%（Ⅳ）の間で存在することができ、この範囲なら、いかなる割増評価水準でも相互的外国貿易が成立するという事です。これを価値交換、不等価交換の度合でいえば、ポルトガルの一〇〇の価値に対してイギリスの価値は六七から九〇の範囲で不等価交換をすることができるということです、物々交換の比率でいえば、第2—2表が示すように、ポルトガルのブドウ酒一〇〇リットルに対してイギリスのラシャは八三ヤード（ $5/6 \times 100$ ）から一一三ヤード（ $9/8 \times 100$ ）の範囲で交換されます。「ポルトガルの一〇〇の価値対イギリスの八〇の価値」「ポルトガルのブドウ酒一リットル対イギリスのラシャ一ヤード」が唯一の交換比率ではありません。リカードのこの点の説明は、第一に、何故にリカードの挙げたような交換比率が成立するのか、その根拠を説明していない点で、第二に、価値交換にせよ物々交換にせよ、その交換可能比率はある範囲をもって存在していることを明らかにしていない点において、大きな欠陥をもっています。そしてのちにみるように、この欠陥がミルによってリカードの外国貿易論の歪曲のために悪用されているのです。

第七に。私たちが、一般に、価値を問題にするさい、その価値の大きさは、当然のことながら、その商品に投下された労働の大きさによって規定されると考えます。外国貿易論で価値を問題にする場合にもそうです。ということは

イギリスの労働もポルトガル人の労働も人間の労働としては同じで通約可能であるということを意味しています。リカードも外国貿易論における不等価交換を導きだすさいにはそうしています。ところが、リカードは、そういう考えだけでなく、ある（外国）商品の価値をそれと交換に提供される（自国）商品の価値で測るというおどろくべきことも他方でしています。リカードの外国貿易論は次のような文章ではじまります。

「外国貿易の拡張は、貨物量、したがって享樂額の増加にはきわめて強く貢献するであろうけれども、しかもそれは、決して直ちに一国内における価値額を増加させるものではない。すべての外国品の価値は、これと交換されるわが国の土地および労働の生産物数量によって測定されるのであるから、かりに新市場の発見によって、わが国の貨物の一定量と交換に外国品の二倍の数量を取得しても、われわれはヨリ大なる価値は得ていない筈である。」(The Works……of D. Ricardo, Vol. I, p. 128, 岩波文庫訳、上巻、一二五頁)

リカードのこのような考えは、「マルサス著『経済学原理』への注解」でヨリ明瞭に述べられています。

「アメリカにとっては、自国の貨物の代償としてアメリカが獲得する貨物が、ヨーロッパ人にとって多くの労働を要するか、それとも少しの労働を要するかはどうでもよいことである。アメリカが関心を寄せることは、ただそれを自国で製造するよりも購買する方が少ない労働ですむ、ということである。」(The Works……of D. Ricardo, Vol. II, p. 383, 岩波文庫訳(マルサス「経済学原理」、下巻、二九九頁))

こういう発言は、すべてを価格の次元でのみ考える資本家にはふさわしいとしても、価値の経済学者リカードにはふさわしくありません。もし、一百万ポンドの自国商品を輸出し、一百万ポンドの外国商品を輸入することがとりもなおさず等価交換を意味するなら、またもし、外国商品の価値が、そこに投下されている労働量によってではなく、

それと交換に提供される商品の価値によって規定されるものならば、外国貿易が一国の価値を増減させないことは論理的にいつて当然であります。何故なら、前提そのものが結論を意味しているからです。問題は、その前提が正当なのかどうか、すなわち、等価格交換はとりもなおさず等価値交換なのかどうか、また、外国商品の価値はその商品に対象化されている労働量によってではなく、その商品と引換えに提供される商品に対象化されている労働量によって規定されるものなのかどうか、であります。この点の理論的混乱はさかのぼっていえば、価値と交換価値の区別がきちんとしていないことに根ざしており、こうなるとこれはひとりリカードだけの問題ではなく古典派経済学者に共通した、そして最後までその誤りから脱却できなかった宿弊なのであります。その点が理論的にきちんとしていないばかりに、等価交換の話をしている内には露呈しませんでした。未熟さを不等価交換の事態に直面してさらけ出す仕儀となってしまうたのであります。

このように欠陥を算え上げてきますと、リカードの外国貿易論は衣川の弁慶のように満身創痍ですが、彼が経済学の宝庫にもたらした大きな功績を考えるなら、その欠陥はただ後世の人間の反省点として考えるにとどめるべきものでありましょう。実際、資本主義世界を四つの数字の中に集約してみせたその抽象力はケネーの経済表にも比すべきものであり、そこから大胆に不等価交換を帰結したその論理力には、ただただ敬服するばかりです。しかし、当時のイギリスの資本家階級にとってみれば、リカードのこの発言は困った問題をひきおこしました。というのは、元来、自由貿易論は、アダム・スミスに典型的にみられますように、重商主義の特権的・独占的外国貿易に対する批判として、また商人資本に対する産業資本の主張として展開されました。そのかぎり、イギリスの資本家階級は歴史の進歩の担い手として自由貿易論を主張することができました。ところが、生産力の不均等分布という現実世界の事態の下

では、とりわけ、産業革命を出発点にして資本主義の本史がはじまり生産力の不均等分布が資本主義的なものとして本格化した十九世紀初期以降の現実世界の事態の下では、自由貿易は先進国に利益を、後進国に損失をもたらしました。自由貿易が現実には有している意味は、スミスがそこにもたせた意味とは異なったものだったのです。または産業革命を契機として自由貿易論をめぐる現実的利害関係は変化してしまったわけです。スミスがマニユファクチュア期の経済学者とすれば、産業資本の展開期に経済学を研究したリカードはこの問題を敏感にとりあげ、いろいろ不十分な点があるとはいえ、この現実を理論として定式化しました。この点、リカードは折角これだけのことをしていながら自覚症状はあまりないのですが、いまや自由貿易論の有する現実的意味は変質し、同じく自由貿易を主張しているとはいえ、スミスのそれとリカードのそれとは決定的に異なったものになってしまいました。すなわち、スミスの外国貿易論は商人資本の独占的外国貿易に対する産業資本の批判、自己主張を表現していました。それに反し、リカードの外国貿易論は自由貿易は先進国に有利であり、したがって自由貿易主張は後進国に対する先進国の主張であることを示唆しました。いわばリカードは事態を露骨に語ったわけです。そして事態を露骨に語るといふこのことが先進国イギリスの資本家にとっては好ましくないことでした。イギリスの資本家にしても自由貿易が先進国イギリスにとって有利であることは、リカードから教わるまでもなく経験的に知っていました。しかし、そのことはあくまで内輪の話で、公けの話としては、自由貿易は歴史の進歩を意味する、自由貿易は諸国民の富を増大する、というスミスの話を後進国に対してする必要がありました。何故なら、そうでなければ、自分の意志として自発的に、イギリス資本主義の餌食になるべく、自由貿易世界の中に入ろうという気を後進国におこさせることができないからです。ですから、スミスの自由貿易歴史の進歩説や自由貿易万国繁栄論は先進国イギリスの資本家にとって不可欠のイデオ

ロギーでした。これこそ、商人資本に対する闘争などということがもはやあまり問題にならなくなった十九世紀中葉になってますます自由貿易運動が盛上がっていった原因です。ところが、ここにイギリス資本主義の鬼子リカードが現われ、自由貿易の下においては先進国は後進国を搾取していること、したがって自由貿易論は歴史の進歩を表現しているのでもなければ、それによって万国の人々が繁栄するわけでもなく、先進国イギリスの利益を単に反映しているにすぎないと事態の真相を暴露しました。リカードのこのような話が、もし、後進国にそのまま伝わったなら、後進国は一斉にイギリスに対して警戒的になり、貿易の自由化を躊躇するようになるでしょう。イギリスの資本家階級はこの点を心配しました。そこでリカードの外国貿易論はなんとかして処分される必要がありました。しかし、リカードの名声はとどろいていますから、またその外国貿易論には理論的な確かさがありますから、真正面からこれを攻撃して否定することは不得策でもあるし困難でもありました。そこで彼らは人々に気付かれない方法でリカードの外国貿易論の毒性を中和するという作戦にでました。そしてその御用学者としてイギリスの資本家階級が指名した人こそ、中和の名人J・S・ミルでした。

二

J・S・ミルの外国貿易論のエッセンスは「経済学原理」より前に、すでに「経済学試論集」において語られています。ですから私もまた、主に「経済学試論集」において示された彼の外国貿易論を検討してゆくことにします。

ミルはその著書を次のようなリカード礼讃の言葉ではじめています。

「経済学がリカード氏によって裕かならしめられた諸々の真理のうち、諸国民がその生産物の相互的交易から引出

す利益について彼がおこなったより正確な分析以上に、知識のこの部門が現在具えている比較的に精緻にして科学的な性質をこれに与えることに貢献したものはなかった。……不朽の著書「経済学および課税の原理」の「外国貿易について」の章で、はじめて、従来の、たとえ積極的に誤ってはいないしても、曖昧にして非科学的な貿易の利益に関する見解に代えるに、この利益の性質を厳密な精緻さをもって説明し、かつその分量の正確な尺度を供するところのひとつの哲学的説明をもってしたのは、この人であった。」(J. S. Mill, *Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy*, 1844, p. 1, 岩波文庫訳、七〇八頁)

さらに、「経済学原理」の第三篇「交換」の第十七章「国際貿易」においても、ミルはリカードを「この問題の解明に向って最大の貢献をなした思想家 (J. S. Mill, *The Principles of Political Economy*, 1848, edited by Ashley, p. 576, 岩波文庫訳、第三分冊、二六六頁)」と高く評価しています。リカードの外国貿易論に対するミルのこのような礼讃の言葉をきくと、一般の読者は、ミルの外国貿易論は、さだめし、リカードの外国貿易論の二つの柱、すなわち、「生産力の不均等分布」と「二国間における不等価交換」という二つの指摘の上に展開されることと思うでしょう。実際、普通の人々にとって言葉というものは自分の気持と反対の気持を表現するためにあるものではありませんから、そう思うのは至極当然であります。ところが、ミルほどの人になりますと、このリカード讃美は、実は、リカードの理論を歪曲し、リカードの影響から人々を引離すための前口上なのです。理解のある相続人のような顔をして関係者を安心させ、その隙に遺産の中味をすりかえるというわけです。ですから称讃の言葉につづいて、すぐに、リカードの理論の歪曲がはじまります。ミルによれば、リカードの外国貿易論の功績は次のようなものです。

「彼(リカードのこと——引用者)の明らかにしたところによると、諸国民間の商品の交易の利益は、ひとえに、これ

によつて各国が与えられた分量の労働と資本とをもつて全体としてのあらゆる商品のヨリ大なる数量を獲得しうるという点にある。」(J. S. Mill, Essays, p. 1~2, 岩波文庫訳、八頁)

率直にいつて、リカードの外国貿易論にこういう側面がないとはいへません。しかし、私たちが、前にもみてきましたように、リカードの外国貿易論の主要な功績がこういう性質のものでないこともまたたしかであります。なんともいふようですが、リカードの外国貿易論の決定的な点は、「外国貿易において先進国は後進国を搾取している」ということにあります。それに、ミルのいうようなことでしたら、そういうことは、すでにスミスが自由貿易の利益として語っていることであり、リカードによつてはじめて解明されたというようなことではありません。そして、ここにみられるように、スミスの外国貿易論とリカードの外国貿易論との差異、すなわち、両者の世界観の差異、そのことからくる外国貿易論の帰結についての両者の差異がきちんと整理されないままに話をはじめたところに、ミルの外国貿易論が自分としても自覚症状のないままにリカードの外国貿易論から逸れていつてしまった大きな原因があるのであります。

ミルにとつて、このリカード理解がとりもおさず、彼の外国貿易論の問題意識になります。リカードの外国貿易論を改善するという彼の建前からすれば、これは当然にでてくるポーズであります。すなわち、ミルは外国貿易の意義を、「一定量の労働と資本の使用による生産物の獲得が（外国貿易をすることによつて）増大すること」、または、「一定量の生産物を獲得するに必要な労働と資本が（外国貿易をすることによつて）節約されること」に求めます。ですから、ミルにとつて、外国貿易論の課題は次のようなものになります。

「労働の節約から生じる生産物の増加分が如何なる割合で二国間に分配されるか、これを研究するのが、この試論

の目的である。』(J. S. Mill, op. cit., p. 5, 岩波文庫訳、一二頁)

これは、「外国貿易では国内交易でのような等価交換の法則は作用していないようだ」という問題意識から出発するリカードの外国貿易論の目的とは明らかに異質のものであります。しかるに、ミルは自分のこの問題意識とリカードのそれとの関連を次のように語ります。

「この問題に、リカード氏は、はるかにヨリ重要な問題に注意を奪われ、かつ一個の科学を建設しなければならなかったがために主だった原理以上のものに携わる時間、または余裕をもたなかったリカード氏は立入らなかった。」(J. S. Mill, Essays, p. 5, 岩波文庫訳、一二頁)

この点は、たしかにミルのいうとおりで、リカードは、こういう問題意識が彼に全然ないとはいえませんが、こういうことに立入って取組むことはしませんでした。ところが、すこし先にすすむと、リカードがこの点について次のように発言したとミルは語ります。

「リカード氏は、外国貿易の利益がなにかから成り、如何なる事情の下に生ずるかを示す以上にこの問題に立入るまいと心掛けながら、不用意にも、交換をしている二つの国の各国が別々に一国および他国における二つの商品の比較的費用の間の差額の総額を利得するように述べた。」(J. S. Mill, op. cit., p. 5~6, 岩波文庫訳、一三頁)

リカードが、時折、スミスの主張を無難作にくりかえして、「自由貿易は両国にとって利益である」と述べていることはたしかですが、ミルがいうように具体的にその量的関係を述べたことはありません。しかし、ここでの問題は本当のところそういうことではありません。ミルがここで本当に云いたいことは、リカードとの関連という形をとって、自分の理論の核心であります。つまり、旧来の外国貿易論の不十分な点と称するものをリカードにかぶせ、そ

の不十分さを指摘することによって、自分の理論の前進的性格を明示しようとしたのであります。濡衣を着せられたリカードこそいい迷惑ですが、こうすることによって、ミルは自分がリカード以上であることを示そうとしたのであります。つまり、彼のリカード讃美とは、結局、リカードにいわれのないケチをつけ、自分を礼讃するための踏み台だったのです。

第2-4表 物々交換表

I) ミルの例

イギリス：広幅ラシヤ10ヤール＝亜麻布15ヤール
ドイツ：広幅ラシヤ10ヤール＝亜麻布20ヤール

II) リカードの例

イギリス：ラシヤ45ヤール＝ブドウ酒40リットル
ポルトガル：ラシヤ45ヤール＝ブドウ酒54リットル

このような高等芸術にも類した前口上につづいて、本格的に、自分の外国貿易論の説明がはじまります。その場合、ミルはリカードに倣って、話をわかりやすくするために第2—4表のIのような例示を用いています。しかし、私たちはリカードとの関連においてミルの外国貿易論を理解したいと思えますので、その点の理解を容易ならしめるために、全く形式的なことで内容的にはどうでもよいことですが、リカードの例示を用いてこれと同質のものを作成し、それにもとづいて話をすすめてゆきたいと思えます。第2—4表のIIがそれです。私が思いますに、ミルがこの表を用いて云わんとしたことは、リカードとの対比を含みにして整理するなら次の二つになります。すなわち、

第一に。ミルは、「このように二商品の物々交換比率が二国間において異なっているときには、この二国間において相互的外国貿易がおこなわれる」と考えます。これについてはミルはとくに事改めて述べていません。それというのもそれは彼にとってきわめて当然のことだったからでしょう。たしかに、この場合、イギリスのラシヤ製

造資本家は自国でならラシヤ四五ヤールと引替えにブドウ酒四〇リットルしか獲得できないのにポルトガルのブドウ酒なら五四リットルも獲得できるのですから、ラシヤをポルトガルへ輸出し、ポルトガルからブドウ酒を輸入しようとするでしょう。またポルトガルのブドウ酒醸造資本家にしても、ラシヤ四五ヤールを獲得するのに、自国でならブドウ酒五四リットルを提供しなければならないのに、イギリスでなら四〇リットル提供するだけですむのですから、彼はブドウ酒をイギリスに輸出し、それと交換にイギリスからラシヤを輸入することに利益を見出すでしょう。このような利益は二商品の物々交換比率が両国において同じであるならば生じないでしょう。したがってまたその場合にはこの二国間において外国貿易はおこなわれません。

第二に。ミルは、「外国貿易による両国の利益の大きさは、二商品の物々交換比率が二国間においてどれだけ異なっているか、その物々交換比率の差によって決まり、その利益量が両国にどのように配分されるかは、イギリスのラシヤとポルトガルのブドウ酒とがどんな割合で交換されるか、いふなれば二商品の貿易交換比率がどの点において決まるかによって決まる」と考えます。ミルの言葉でいえば、次のようになります。

「二国を併せて利得の総額は労働の節約にあり、その労働の節約は他方の商品のそれと比べた一方の商品の費用の二国における差額に精密に等しいのであるから、二国を併せてこの差額以上に利得することはなく、もしいずれかの国がその総額を利得すれば他方の国は貿易からなんらの利益をも引出さないのである。」(J. S. Mill, *op. cit.*, p. 6, 岩

波文庫訳、一三頁)

第2—4表のⅡの例示を用いてこのことを説明しますなら、ラシヤ四五ヤールに対するブドウ酒の交換比率がイギリスでは四〇リットル、ポルトガルでは五四リットルですからこの差額が外国貿易による利益の大きさになります。

そしてこの利益がイギリスとポルトガルの両国にどのように配分されるかは、イギリスのラシャとポルトガルのブドウ酒とが外国貿易においてどのような比率で交換されるかによって決まります。たとえば、イギリスのラシャ四五ヤールとポルトガルのブドウ酒五四リットルとが交換されるなら、すなわちポルトガルにおける二商品の物々交換比率と同じ比率で交換されるなら、イギリスはラシャ四五ヤール当りブドウ酒一四リットルの利益を外国貿易から獲得し、他方、ポルトガルはこの外国貿易から全く利益を獲得しません。ですから、この場合には外国貿易による利益は全てイギリスが獲得します。反対に、イギリスのラシャ四五ヤールとポルトガルのブドウ酒四〇リットルとが外国貿易において交換されるなら、すなわち、イギリスにおけるこの二商品の物々交換比率と同じ比率で交換されるなら、ポルトガルはラシャ四五ヤール当りブドウ酒一四リットルの節約利益を外国貿易から獲得する、または同じことを別の表現でいえば、第2―2表のⅢからわかるように、ポルトガルはブドウ酒四八リットル当りラシャ一四ヤールの利益を外国貿易から獲得し、他方、イギリスはこの外国貿易の下では全く利益を獲得しません。ですから、この場合には、外国貿易による利益は全てポルトガルが獲得します。また、イギリスのラシャとポルトガルのブドウ酒との交換が、前述の二例の間のどこか、たとえば、イギリスのラシャ四五ヤール対ポルトガルのブドウ酒四五リットルの比率でおこなわれるとすれば、その場合には、イギリスはラシャ四五ヤール当りブドウ酒五リットルの利益を獲得し、ポルトガルはラシャ四五ヤール当りブドウ酒九リットルの節約利益または、第2―5表のⅡにおいて示したように、ブドウ酒二七〇リットル当りラシャ四五ヤールの利益を獲得します。したがってこの場合には、イギリスもポルトガルも外国貿易から利益を獲得することになります。要するに、外国貿易による利益の大きさは二商品の交換比率が二国間でどのていど異なるかによって決まり、その利益量が二国間にどのていどずつ配分されるかは、二商品の貿易交換

第2-5表 物々交換表

I) ラシヤを基準に表現した場合

貿易交換比率：ラシヤ45ヤール＝ブドウ酒45リットル

ポルトガルでの比率：ラシヤ45ヤール＝ブドウ酒54リットル

II) ブドウ酒を基準に表現した場合

貿易交換比率：ラシヤ 270 ヤール＝ブドウ酒 270 リットル

ポルトガルでの比率：ラシヤ 225 ヤール＝ブドウ酒 270 リットル

比率がどの水準に決まるかによって決まります。

ミルがこの試論で述べている論点は他にもいくつかありますが、当面必要とする面にしぼってそのエッセンスを語るならば、ざっとこのようになります。この話をこれだけのこととして聞かぎり、そこにはなんの矛盾もなくそのとおりということになります。そして、外国貿易というものはそれに関係する両国に利益をもたらすもの、すくなくとも損はしないものということを経から学びます。しかし、リカードから「外国貿易において先進国は後進国を搾取する」ということをすでに学んでいる私たちにしてみれば、リカードの外国貿易論を改善した筈のミルの外国貿易論の帰結がリカードのそれとは似ても似つかぬものになっていることに戸惑いを感じます。一体、これはどうしたことなのでしょう。一体、どちらが本当なのでしょう。先進国はどちらの場合にも利益を獲得するからよいとして、後進国は、リカードのいうように損をするのでしょうか、それとも、ミルのいうように利益を獲得するのでしょうか。それに、一体、ミルのいう外国貿易による利益というのは現実の世界にひきもどして考えたとき具体的にいつてなんなのでしょう。未開社会の人ならともかく、高度の商品貨幣経済の中で暮している現代の私たちには、ミルがどんなに論理的に精密に説得的に外国貿易による利益を語っても、それが物々交換の世界でのみ語られているかぎり、現実の問題としてその利益がなんなのかがよくわかりません。実際、ミルの外国貿易論の特色は、それが物々交換の世界でのみ外国貿易

を語っているところにあります。すなわち、裏からいえば、価格とか価値とかを一切問題にしていなくてここにあります。そして、私の思いますに、ここにミルの外国貿易論の手工品の種のすべてが賭けられています。ですから私たちは、ミルのこの外国貿易論の正体を明らかにするために、物々交換の世界でのみ語られた彼の外国貿易論を価格および価値と関連させてより詳細に分析してみたいと思います。

まず、価格との関連でミルの外国貿易論を検討してみたいと思います。ここでは、ミルの外国貿易論の私なりに整理した前述の第一の命題および第二の命題が価格の世界に翻訳してみるとなんなのか、その現実的性格を明らかにしてみたいと思います。

第一に。ミルの外国貿易論がその話をすすめてゆくさいに例示に用いている物々交換表（第2—4表のⅡ）を価格関係の表に還元しますと、たとえば、前に示しました第2—3表のようになります。ⅠからⅤまで五種類の価格関係表をあげましたが、これはみな第2—4表のⅡの物々交換関係と対応しています。その上、この五種類にかぎらず、この物々交換関係を反映した価格表は無数に作成することができます。ということは、あるひとつの物々交換表はあるひとつの価格表と対応するのではなく、ある一定の条件を充した無数の価格表と対応するということです。同じことを別の言葉でいえば、ある価格表は一義的にある物々交換表を決定しますが、ある物々交換表は一義的にある価格表を決定するわけではないということです。いうなれば、両者は数学でいう等値の関係にないということです。あるひとつのことを価格で表現したときと物々交換で表現したときとはどこがどういう風に異なってくるか、価格で表現してあるものを物々交換的に表現することによってなにが変化するのか、第一点としてまずこの点を確認しておきたいと思います。

第二に。ミルが実際おこなっているように、第2—4表のⅡのような物々交換関係、すなわち、二商品の物々交換比率が二カ国の間で異なっているときには、物々交換の世界で考えるかぎり、相互的外国貿易がおこなわれます。しかし、この物々交換関係を価格関係にひきもどして考えてみますと、このような物々交換関係だからといって、必ず相互的外国貿易がおこなわれるとはかぎらないことがわかります。すなわち、第2—4表のⅡの物々交換関係に対応する価格関係として私たちはたとえば、第2—3表のⅠからⅤまでのような五種類の価格関係を考えることができます。これは物々交換的表現になおせば第2—4表のⅡになり、したがって、相互的外国貿易になる筈です。しかし、この五つの価格表の内、ⅠおよびⅤでは相互的外国貿易になりません。すなわち、Ⅰではイギリスの一方的輸出になりますし、Ⅴではポルトガルの一方的輸出になります。Ⅲのような価格関係のときにはじめてイギリスはロシアを輸出し、ポルトガルはブドウ酒を輸出することによって相互的外国貿易が成立します。そして、第2—4表のⅡの物々交換表は第2—3表のⅢの価格表を一義的に決定するという保証はどこにもありません。ということは、「二商品の物々交換比率が二国間において異なっているときにはこの二国間において相互的外国貿易がおこなわれる」とは必ずしもいえない、すなわち、ミルの外国貿易論の第一の命題は普遍的には妥当しないということです。

このことは、ミルおよびミルの外国貿易論を継承しているその後のブルジョア経済学者にとってみれば重大な意味をもっています。というのは、元来、ミルにしてみれば、「交易（ここでは外国貿易のこと——引用者）を決定するものは、絶対的生産費の較差ではなくて、比較的費用の較差である」（J. S. Mill, op. cit., p. 2, 岩波文庫訳、八〇九頁。なお、傍点は大文でイタリック字体の個所）という彼の言葉からもわかるように、国内交易ではたしか絶対的生産費の法則が作用するが、こと外国貿易においては、絶対的生産費の点で高くとも比較的費用の点で安ければその商品は輸

出できる、同じことを別の言葉でいえば、絶対的生産費の点では二商品とも一方の国においてより安くとも比較的費用の差があれば相互的外国貿易になると考え、それを国内交易にはみられない外国貿易に独自の事態ととらえ、比較生産費（comparative cost）説とそれを銘打って大いに売込んでいたのです。しかし、リカードのように価値の世界に立脚してこの問題を考えるのならともかく、「『価値』という言葉は、経済学において付属詞なしに使用された場合には、いつも交換価値を意味する。」（J. S. Mill, *Principles...*, p. 437, 岩波文庫訳、第三分冊、二二頁）という言葉からも分るとおり、価値を交換価値と同一視し、そうすることによって経済学から価値を追放したミルの経済学では、生産費とは事実上価格の世界の言葉であり、そうであるかぎり、外国貿易に作用しているものは国内交易におけると同様、絶対生産費の法則であって、比較生産費の法則ではありません。第2—3表の1の価格表を例にしているなら、いくら比較費用の点で有利であろうとも、イギリスのラシャ製造資本家は、自国でなら一リットル九〇シリングで購入できるブドウ酒をわざわざ一〇〇シリング支出してポルトガルから輸入する筈はありません。ですから、ミルの外国貿易論の第一の命題は少なくとも一般的には主張できません。

第三に。それにしても、ミルのいう外国貿易による利益とは一体なんなのでしょいか。次に、この利益の正体を明らかにしてみたいと思います。前にも示しましたように、イギリスとポルトガルの貿易交換比率がもしラシャ四五ヤール対ブドウ酒四〇リットル、すなわち、イギリスにおける二商品の交換比率に等しいならば、外国貿易による利益はすべてポルトガルが獲得し、イギリスはこの外国貿易から全く利益を獲得することができません。このことはすでに以前に確認しました。そこでここでは、このことは価格の世界でいうとどういうことになるのかを考えてみたいと思います。これまた以前に示したことです。イギリスとポルトガルの間に相互的外国貿易が成立するためには、第

2—3表のⅡとⅣの間に両国の価格関係が成立すること、たとえばⅢのような価格関係の成立することが前提であります。そこでたとえば、このⅢを基礎にして考えてみますと、前述のような貿易交換比率になるということは、価格の世界でいうと、イギリスのラシャが一ヤール九六シリングでポルトガルに輸出され、ポルトガルのブドウ酒が一〇八シリングでイギリスに輸出されることを意味します。たしかにこの価格関係においてなら、そしてこの価格関係においてのみ前述の貿易交換比率は成立します。私たちは物事を経験主義的に、腰だめに取扱っているのではありませんから、ここからすぐに結論に入ってもよいのですが、念のために、もうひとつの例、そして前と全く逆の極端な場合、すなわち、貿易交換比率がイギリスのラシャ四五ヤール対ポルトガルのブドウ酒五四リットル、すなわちポルトガルにおける二商品の物々交換比率と同じで、イギリスが外国貿易から全ての利益を獲得し、ポルトガルが全然利益を獲得できない場合を取上げて考えてみましょう。価格の世界でいえば、これはイギリスのラシャが一ヤール一二〇シリングでポルトガルへ輸出され、ポルトガルのブドウ酒が一リットル一〇〇シリングの価格でイギリスへ輸出されることを意味します。

ところで、イギリスのラシャが一ヤール一二〇シリングでポルトガルに輸出されるということはどういうことでしょうか。第2—3表のⅢにおいてもわかりますように、イギリスのラシャ価格は九六シリング、ポルトガルのラシャ価格は一二〇シリングで、その価格差は二四シリングであります。ですから、こういう価格関係の下で、イギリスのラシャが一ヤール一二〇シリングでポルトガルに輸出されるということは、自国イギリスの価格ではなく、相手国ポルトガルでの価格で輸出されるということであり、両国間におけるラシャの価格差の全てをイギリスのラシャ製造資本家が獲得するということになります。同じことはブドウ酒についてもいえます。第2—3表のⅢが示していますよ

うに、イギリスのブドウ酒価格は一〇八シリング、ポルトガルのブドウ酒価格は一〇〇シリング、したがってその価格差は八シリングであります。ですから、こういう価格関係の下でポルトガルのブドウ酒が一リットル一〇〇シリングでイギリスに輸出されますならば、それは自国ポルトガルの価格で輸出されるということであり、したがって、両国間におけるブドウ酒の価格差八シリングの全てをイギリスのブドウ酒消費者が享受するということになります。話をまとめていいますならば、イギリスのラシャとポルトガルのブドウ酒の外国貿易がポルトガルにおける二商品の物々交換比率と同じ貿易交換比率でおこなわれるということは、すなわち、ミルのいう外国貿易による利益がイギリスに全て帰属するということは、イギリスとポルトガルの二商品の価格差にもとづく利益をラシャについてもブドウ酒についてもイギリスがすべて獲得し、ポルトガルはこの外国貿易から全然利益を獲得しない(勿論、損はしない)ということの意味しているのです。要するに、ミルのいう、二商品の物々交換比率が二国間において異なっていることから生じる外国貿易の利益とは、その実、二国間における各商品の価格差にもとづく利益のことだったのです。このことに関連して次の三つのことが指摘されておかなければなりません。

1. ミルのように物々交換の世界で考えるときには、利益は物々交換比率差利益というひとつのものであり、そのひとつの利益が二カ国の間にどのように分割され帰属するかという問題でしたが、具体的に価格の世界で考えてみますと、それは二商品のそれぞれについての価格差利益という二つの利益に分れることがわかります。これは物々交換というものが二商品に関連したものであり、価格というものが一商品に関連したものである以上、当然のことであり、物々交換の世界ではひとつのものととして表現されていた利益は、価格の世界に還元された場合、二つの利益に分解されます。

2。ここでもまたミルの外国貿易論の第一の命題が問題になります。これは古典派経済学者に共通したことでミルに限ったことではありませんが、ミルは「二商品の物々交換比率が二国間において異なっているときには、この二国間において外国貿易がおこなわれる」と考えます。価格の世界にひきもどして考えてみるとこの命題が一般的には妥当しないことは前に示しました。ところで、この命題の成立するような価格関係、たとえば第2―3表のⅢのような価格関係で考えてみますと、この命題が実際に述べていることは、「価格差があれば外国貿易がおこなわれる」ということに帰着します。これがこの命題の実際的内容です。しかし、ミルの話もここまでつきつめてくると啞然とせざるをえません。何故なら、価格差があれば外国貿易のおこなわれるぐらいのことは三才の幼児でも学ばずしてわきまえていることであり、事実上、同義反復にひとしい話だからです。なにか巧妙な感じのする仕掛けの下におこなわれたミルの手品も、その種を明かすなら、このようななんとも呆気ないものだったのです。ミルの第一の命題は、第一に一般的には妥当しませんし、第二に、妥当する場合にも、それは事実上同義反復にすぎないのです。

3。私たちは、以前に、リカードの外国貿易論を検討していたときには、第2―3表のⅢを立入って検討しませんでした。それというのも、リカードの外国貿易論の場合には二国間における不等価交換が主要なテーマであり、したがって、第2―1表と第2―3表のⅢとの比較をとおして、「イギリスがポルトガルを搾取している」という帰結を導き出すことに主力が注がれていたからです。しかし、考えてみますと、その上に、第二義的な話として、第2―3表のⅢの価格の世界で、それぞれの商品について、二国間の価格差にもとづく利益をどちらの国がどれだけ獲得するかという問題が残されていることに気がきます。そして、ミルの外国貿易論は、善意に理解すれば、この問題を取扱ったといえますし、いわば、リカードの外国貿易論に対して補完の役割を果たしているといえます。リカードが話の

基本的骨格を明らかにしただけでおわりにしたのに対し、ミルがその上に立って最後の詰めといいますが、仕上げと
 いますか、それをしたことになります。しかし、それはあくまでミルを最大限に好意的に理解した場合の話で、ミ
 ル自身にもそんな気持はありません。ミルは自分の物々交換的な話が価格の世界にひきもどすとどういふ意味になる
 のか全然考えていませんし、いわんや価値の世界との関連については一言も触れていません。こういうスタイルで話
 がおこなわれているかぎり、ミルの外国貿易論はリカードの外国貿易論の補完ではなく、その否定です。それでいて
 ミルは自分の外国貿易論はリカードのそのの不十分な点を是正したものだと言張します。それというのも、そう主張
 すれば、外国貿易論というものはそもそものリカードのときからミルのような発想でおこなわれていたかのような印
 象を世間の人々に与えることができ、そうすることができれば、「不等価交換」というリカードの外国貿易論のエッ
 センスを闇に葬ることもまたできるからです。

第2-6表 価 値 表
 （ロシア1ヤール当り価値量，
 ブドウ酒1リットル当り価値量）

		ラシヤ	ブドウ 酒
I)	イギリス	80	90
	ポルトガル	120	100
II)	イギリス	88	100
	ポルトガル	120	100
III)	イギリス	96	108
	ポルトガル	120	100
IV)	イギリス	120	135
	ポルトガル	120	100
V)	イギリス	136	153
	ポルトガル	120	100

さあ、ここへきて、私たちは、次に、ミルの外国貿易論を
 価値との関連で検討する必要が生じてきました。どちらかと
 いえば価格との関連ではミルの外国貿易論の不十分さが指摘
 されましたが、こんどはミルの外国貿易論が隠蔽しているも
 のを明らかにしてみたいと思います。

第一に。第2—4表のIIの物々交換関係を支える価値関係
 として、私たちは無数のものを考えることができますが、た
 とえば、そのうちのいくつかとして、第2—6表に示したよ

うな五種類の価値関係を考えることができます。念のためにいえば、Ⅰにおいては、イギリスが二商品のいずれの生産においてもすぐれている先進国であり、ポルトガルは後進国であります。また、Ⅴにおいてはポルトガルが二商品のいずれの生産においてもすぐれている先進国であり、イギリスは後進国であります。他方、Ⅲにおいては、イギリスがロシアの生産にすぐれ、ポルトガルはブドウ酒の生産にすぐれているわけで、概していえば、イギリスとポルトガルとはほぼ同じ生産力水準にあるといえます。ところで、これらの価値関係は、物々交換表になおしますとどれも第2—4表のⅡのようになります。ということは、第2—4表のⅡの物々交換表をみただけでは、イギリスが生産力上優位に立っている国なのか、それともポルトガルが生産力上優位に立っている国なのか、総じて、イギリスとポルトガルとの生産力関係がわからないということでもあります。そしてミルの外国貿易論はその物々交換表のみにもとづいて理論が展開されるのですから、結局、二国間の生産力関係を曖昧にしたまま話をすすめるということになります。

ここへ来て、私たちは、リカードがいわゆる比較生産費説を提起したときの問題意識をもう一度想い起さざるをえません。そのさい述べましたように、リカードは、「たとえ、生産力上の優位が一方の国に偏っていても、相互的外国貿易が成立するのは何故か」という問題を立て、その結果として、「二国間の不等価交換」を導き出しました。これをミルの外国貿易論の第一の命題に即して表現しなおしますなら、「たとえ生産力上の優位が一方の国に偏っていても、二商品の物々交換比率が二国間において異なっているときには、この二国間において相互的外国貿易が生じる」というのがリカードの比較生産費説の内容です。このように、生産力関係を問題にし、生産力の不均等分布という事態を問題にしたからこそ、比較生産費説というものがとりわけ提起されたのです。ですから、比較生産費説にとって、生産力関係、価値関係、生産力の不均等分布ということは密接不可分のものであります。ところが、ミルの比

較生産費説は、生産力とか価値を捨象し、リカードの比較生産費説の命題から、人々にはつきりと断わることなく、私が傍点を付した認容条件の部分をはずしてしまいました。これでは、比較生産費説が本来もっていた問題意識が見失われてしまいます。そしてミルの比較生産費説とはそういうものなのです。彼の外国貿易論が第一の命題にしても第二の命題にしても現実の価格の世界にひきもどしてよくみると、前にみましたように、案に相違して実りの乏しい内容のものでしかないのも、比較生産費説のかんじんのところをはずしてしまっているからなのです。しかし、話がここまで来ますと、最後のところ、一体全体、言葉の正確な意味における比較生産費説というものがそもそも成立するのかどうか、という根本的な疑問に突当ります。「生産費」というものが価格の世界の言葉であるかぎり、国内交易におけるのは別の法則が外国貿易には作用するとして、絶対生産費の法則と対比されるものとしての比較生産費の法則が外国貿易に作用するとはいえないからです。前にも述べましたように、外国貿易に作用しているものは、国内交易におけると同様、絶対生産費の法則です。それにもかかわらず、比較生産費の法則が唱えられるとするなら、それはリカードがしたように、価値の世界をふまえることが絶対不可欠です。そして、比較生産費説とはその実生産費または価格の比較ではなく、価値の比較の中で生まれたものであり、価値との関連でのみ意味をもつものなのです。そう考えてきますと、比較生産費の理論は正確には、比較価値の理論というべきでありましょう。言葉遣いというものは、歪曲を防止するためにも、できるだけ内容に即したものにすることが必要があります。

第二に。それにしてもミルは、何故に、自分の学問的生命を傷つけるような危険を冒してまでも、このように価値を捨象したのでしょうか。それは察するに、価値を捨象すれば、リカードの比較生産費説の帰結であり、イギリスの産業資本家が心から嫌悪した、あの「二国間の不等価交換」、「外国貿易において先進国は後進国を搾取している」と

いう命題を自動的に曖昧にすることができずからです。しかも、曖昧にするだけでなく、ミルは物々交換表をひねくりまわすことによって、外国貿易は関係する二カ国に利益をもたらす、すくなくとも損はさせないという結構な相互利益論で搾取の事実を隠蔽しました。たとえば、いま、第2—1表のような価値関係にイギリスとポルトガルがおかれ、その価格関係は第2—3表のⅢのようであったとします。その節にも述べましたように、この場合には、先進国のイギリスは後進国ポルトガルとの外国貿易において、価値を二〇パーセントだけ高く評価される、つまり、それだけの不等価交換で利益をえることができます。ポルトガルは自国の価値六に対してイギリスの価値五しか受取ることができず、損をします。ところで両国のこの価値関係、または、量的には同じことになりますが、価格関係を物々交換関係になおしますと、第2—4表のⅡのようになります。ここで極端な例として、このような関係において、貿易交換比率が、イギリスのラシャ四五ヤールに対してポルトガルのブドウ酒四〇リットル、すなわち、イギリスにおけるこの二商品の物々交換比率と同じであったとします。そうしますと、さきにも述べましたように、この外国貿易において、ポルトガルは利益のすべてを獲得し、イギリスは全く利益をえません。すなわち、ミルのお好きな物々交換の世界で考えれば、ポルトガルが最大の利益を獲得している場合です。これは価格の世界で考えますなら、第2—3表のⅢで、イギリスとポルトガルの間の二商品のそれぞれの価格差利益のすべてをポルトガルが獲得する、すなわち、イギリスはラシャを九六シリングでポルトガルに輸出し、ポルトガルはブドウ酒を一〇八シリングでイギリスに輸出するという場合に該当します。しかし、価値の面から考えるなら、イギリスの価値三六〇〇（ 80×45 ）とポルトガルの価値四〇〇〇（ 100×40 ）が交換されているわけであり、両国間に不等価交換がおこなわれ、イギリスが利益を獲得し、ポルトガルが損失を蒙っているという事実にはいささかの変更ありません。尤も、この不等価

交換の度合は、第2―表3のⅢの不等価交換の度合、すなわち、イギリスの価値五対ポルトガルの価値六とは異なり、不等価交換の度合はやや縮小しています。これは、第2―表3のⅡにおける不等価交換の度合を基準にして、貿易交換比率がどこに決まるかによって、または二商品の貿易価格がどこに決まるかによって、不等価交換の度合が多少変動するからです。その場合、その不等価交換の度合の変動は、当然のことながら、物々交換比率差利益をより多く獲得する国の方に有利に動きます。たとえば、前と全く逆の極端な場合、すなわち、貿易交換比率がポルトガルにおける二商品の物々交換比率と同じで、イギリスのラシヤ四五ヤール対ポルトガルのブドウ酒五四リットル、したがって、外国貿易による利益はすべてイギリスが獲得し、ポルトガルはなんらこの外国貿易から利益を獲得していない場合を考えますと、この場合における価値の交換は、イギリスの価値三六〇〇（ 80×45 ）とポルトガルの価値五四〇〇（ 100×54 ）となり、不等価交換の度合は第2―表3のⅢにおけるよりも大きくなります。すなわち、不等価交換の度合は、この場合、貿易交換比率がどこで決まるかに応じてイギリスの価値二対ポルトガルの価値三の比率からイギリスの価値九対ポルトガルの価値一〇の比率の間で変動します。しかし、大切なことは、どう変動するにせよ不等価交換の事実には変わりなく、ポルトガルがこの外国貿易から物々交換的にいって最大の利益を獲得している場合にもポルトガルはイギリスと不等価交換をして損をしているということでもあります。これこそ大事な点であります。そして、これこそミルが隠蔽しようとした点であります。要するに、ミルの外国貿易論は、イギリスが先進国たる地位において後進国を搾取している事実を隠蔽し、かつ、先進国から搾取されているにも拘わらず利益をえているかのような錯覚を後進国に与えるためのものだったのです。マルクスはこの点を次のように述べています。

「リカードの理論を観察してさえも——セーはこのことを注意していないが——、一、国、の、三、労働、日、が、他、国、の、一、労働

日と交換されう。価値法則は、この場合、本質的な変形をこうむる。いいかえれば、一国内において熟練労働、複雑労働が、不熟練労働、単純労働に対して有するのと同じような具合に、諸国の労働日は互いに関係しあっている。この場合においては、富国が貧国を搾取するのであって、このことは、ジョン・スチュアート・ミルもまた彼の著『経済学試論集』において述べているごとく貧国がその交換によって利得する場合においてさえも、そうである。』(K. Marx, Theorien über Mehrwert, Bd. III, S. 102, 改造社版マルクス・エンゲルス全集、第十一卷、二八五頁。傍点は引用者のもの)

さて、そろそろ時間ですので、今日はこのぐらいにして、今日お話したことを簡単にまとめてみたいと思います。イギリスの産業資本家階級は、先進国の資本家階級として、自由貿易が自国に有利であり、後進国である他国に不利であることを本能的に知っていました。ですから、彼らは自由貿易を世界のすみずみにまで拡大したいと考えました。しかし、これは相手あつてのこと、相手国、すなわち、イギリスより後進的地位にある国がイギリスと同じく自由貿易政策を採用することが前提条件となります。その場合、イギリスは、できるなら、後進国が自発的に自由貿易政策に踏み切ることを期待しました。勿論、それが期待できないときには、阿片戦争にみられるように、軍艦と大砲で無理に他国の門戸をこじあけることを厭いませんでしたが、「平和的に」事を進めたいと考えました。それには、自由貿易はそれに参加する諸国のいずれにとっても利益であるという自由貿易相互利益論で後進国の資本家階級を瞞着する必要がありました。そうなれば、後進国は先進国の生け贄になるべく自発的に自由貿易に参加するようになるからです。アダム・スミスの自由貿易相互利益論は、発生史的にはそれがなんであれ、産業革命後のイギリスではそういうものとして利用されたのです。しかし、スミスの自由貿易相互利益論は生産力の均等分布とい

う非現実的な世界観を基礎にしており、その点、理論として難点をもっていました。そして、イギリス資本主義の鬼子であるリカードは真正直にもこの難点を衝いて、生産力の不均等分布という現実的世界観の下に、「外国貿易において先進国は後進国を搾取している」ことを示唆しました。しかし、こんなことがあからさまに語られることは、イギリスの産業資本家階級として絶対に容認できることではありません。それは自由貿易相互利益論に対する真向からの否定であり、後進国を自由貿易政策の中止へと追いやるものだからです。ここへきて、イギリスの産業資本家階級は尤もらしい自由貿易相互利益論の再構成の必要に迫られました。ミルの外国貿易論はその必要に応えるものとして登場してきたのです。ミルは無意識のうちにこう考えました。すなわち、スミスの自由貿易相互利益論が理論として難点をもっていたのも、リカードが外国貿易における不等価交換を帰結したのも、もとはといえば労働、生産力および価値を土台に外国貿易を考えているからである。これらを土台にするなら、自由貿易相互利益論が説得力に欠け、不穏な不等価交換論がでてくるのも当然である、だから、要は、労働とか生産力とか価値とかいったこういう危険な概念を外国貿易論から追放してしまうことである。ミルが意識的にそうしたのかどうかは、ミルがなにもこの点について述べていない以上、なんともいえませんが、彼のしたことは結局こういうことでした。その場合、ミルはリカードを事実上否定しているにも拘わらず、否定するとはいいませんでした。ミルが、実際そうであるように、はっきりリカード批判として自分の外国貿易論を語ったのならそれはそれとして学問的にはあるていど許せると思います。そうすれば、人々はリカードの外国貿易論とミルの外国貿易論の差違について特に注意して検討してみたでしょうし、そうすれば、リカードの外国貿易論を批判したミルの外国貿易論の方こそ批判されるべき性質のものであることに気付いたであらうからです。しかるにミルは、そういう方法をとると藪蛇になることに気付いたのか、リカードが物々交

換的に外国貿易論を取扱っていることもあるのをよいことにして、外国貿易論は最初のリカードのときから物々交換的であり、自分はリカードの不十分な点をただ改善したものにすぎないと強弁しました。いふなれば自分の物々交換的外国貿易論を語るだけでなく、それにリカードをまきこみ、そうすることによってリカードの外国貿易論を骨抜きにしたのであります。リカードの名声を考えますなら、これはリカードを真向から否定するよりはるかに有効な方法でした。こういう小細工のもとにミルの物々交換的外国貿易論は登場してきたのですが、物々交換の世界だけで外国貿易論を語るなら、外国貿易論が自由貿易相互利益論になることは、さきにもみましたように、理の当然であります。かくして、資本主義世界における先進国イギリスの産業資本家階級のイデオロギー的武器である自由貿易相互利益論はミルの修繕によって理論として再構成され、再び力強く主張されることになりました。この点を見るかぎり、ミルはその階級的使命を十分に果たしたといえましょう。ミル以後の外国貿易論者がおしなべて比較生産費説を肯定し、しかも、それをミル流の方法で語っているのをみますならば、ミルは比較生産費説を「確立」した人として、その「功績」は高く評価されるべきなのでしょう。しかし、学問としては、いままでみてきましたように、墮落の途に陥ったとしかいいようがありません。私たちは、御用学者の立場に立つと学問が駄目になることのひとつの例証をここにも亦みることができます。